

戦後青森県の県会議員選挙と歴代議長 ③

—地方政治の“名望家たち”—

藤 本 一 美

序 文

一般に、「名望家」といえば、特定の地域社会で影響力を備えている人々のことを指し、かつては、名士、徳望家、素封家、および旧家などと呼ばれていた。その活動は、政治、経済、および文化など多方面にわたっており、そのため、厳密に定義することは難しい。ただ、彼等に共通している要素は、村役人、区長、および戸長(こちょう)などの政治上の公職・名誉職を兼務し、一定の行政能力と地域社会をまとめる才覚を持っていること、また十分な経済力を有し地域産業の発展に寄与する一方で、常に地域社会への慈恵的行為を怠らないこと、さらに高い教養を身につけ地域文化の担い手になっている点などを挙げることができる(「横浜の地方名望家—横浜開港資料館」www.kaikou.city.yokohama.jp/journal/106/02.html)。

そこで本稿では、「名望家」とは、さし当り財産と教養を有し、特定の地域社会内で声望を得ている人々のことをいい、その声望の権威により服従を求めることができる、と定義しておきたい。戦前までは、地主や地方産業家などが名望家を中心とする政党を組織し、それは「名望家政党」と称されていた(五十嵐暁郎「名望家」『社会学事典』[弘文堂、1988年]、864頁)。

今日でも、県会議員(以下、単に県議と略す)のほとんどが、いわゆる

「名望家」によって占められている。実際、県議は教養と財産を有し、市町村長や市町村議員の出身者が少なくなく、地域社会で重要な政治的、経済的、および文化的役割を担っている。

それでは、本稿で論議の対象にしている県議とは如何なる存在であるのか？ 彼らは県民を代表して4年ごとに選挙で選ばれ、県の予算や業務について審議し、県政の方針を決定する。そのため、大きな権限が与えられている。その主なものを挙げれば、次の通りである。

1. 議決（①条例の制定・改正・廃止，②予算の決定，③法律や条令で定められた重要事項の決定）。
2. 認定・決算の審査。
3. 調査・検査・監査請求，県業務の監視。
4. 請願・陳情受理。
5. 意見書の提出。
6. 選挙（議長，選挙管理委員などの選出）。
7. 同意（副知事，行政委員の選任・任命に同意）。

県議には、学歴も経歴も不問であり、県会議員選挙（以下、県議選と略す）への立候補の条件さえ満たしていれば、誰でも出馬できる。立候補の条件は三つある。すなわち、①満25歳以上の日本国民であること，②その都道府県の選挙権を有していること，③供託金60万円を提出できること。供託金とは、出馬時に預けるお金のことで、一定の得票数を得ていれば選挙後に戻される。なお、県議の兼業は基本的に禁止されている。

今日でも、県議は地方におけるいわゆる「名望家」的存在である、とあってよい。上で述べたように、名望家とは、特定の地域社会において名声や人望を兼ね備えた人々のことを指し、実際、県議は県レベルで政治的に重要な位置を占めており、社会的に大きな威信を有している。県議は議会において、県内で生じたあらゆる政治的問題を取り上げ、県執行部を質

し、県民生活の向上に努める。県議の任期は4年間で再選は何回でも可能だ。与党議員の場合には、4回ないし5回連続して当選すれば、議長に就任する。ちなみに、青森県の現議長は、自民党所属で当選4回の熊谷雄一県議である。

県議の生活は、大きく議会の会期中（＝開会中）と会期外（＝閉会中）とに分けられる。また4年に一度の県議選の際は、選挙運動中心の生活となる。1年間に開会される県議会の日数は、365日のうちの約三分の一以下であり、県議の職場である議会は、定例会、臨時会を含めて年間平均5、6回程度招集され、その平均会期日数は約98日に過ぎない。

県議会は、午前と午後、1日に二度開会した場合、開会時間は、通常、午前は10時～11時、また午後は1時に開かれ、午後5時には終了する。議事に提出されている議案にもよるものの、県議一人当たりの議会での質問―質疑時間は、平均すると1時間程度である。県議はまた、議会において、自身が所属している常設の「委員会」、そのつど設けられる「特別委員会」、さらに所属する会派の「議員総会」にも出席しなければならない。

県議会の年間スケジュール表だけ拝見すると、「県議はかなりヒマな業務」だと見えないわけでもない。だが、実際には、県議は限られた質疑時間内に質問や発言を行い、県議会として適切な議決をする。そのため、議会開会の準備に備えて、多くの時間と労力をつぎ込んでいるのが現実で、閉会中も議会の再開に備えて、調査や準備を怠らない。

このように、県議は議会で取り上げる県の各種の計画や活動、自らの政策などについて、会期中外を問わず、県職員から話を聞き、専門家からレクチャーを受けたりなどして調査・研究に専念しているのが普通で、また会派が主催する会議にも出席する。

県議の場合、同じ地方議員である市町村議員とは異なり、県全体という極めて広い地域を扱うため、勢い調査範囲が広くかつ問題も複雑化する傾向にある。そのため、市町村議員と比べると、調査・研究に長い時間をか

ける傾向にある。

県議となる者には、市長選での敗退者や市町村会議員出身者が見られる一方で、逆に、県議の経験を積んだ上で、市長に鞍替えするケースもある。もちろん、県議としての実績を踏まえて、衆議院議員、参議院議員、および知事に立候補することも可能だ（巻末の資料を参照）。

2018年現在、青森県の場合、選挙区は16で定数が48名であって、保守系議員が圧倒的多数を占めている。議員の報酬は、月額78万円（議長91万円・副議長81万円）で、この他に期末手当が年間で3.1ヵ月分、また政務調査費が月31万円支給されている。現在の県議会の会派別議員は、図表①の通りで、自民党が定数の過半数を優に超え、正副議長や委員会の正副委員長職も独占している。

戦後最初の青森県議選は、1947年4月30日に行われた。それまでは、戦前の1942年に選出された県議が戦争中だという特殊な事情もあって、任期を延長して、そのまま居座っていた。しかし、敗戦を契機に、新しい地方

＜図表① 青森県議会の会派別議員：定数48＞

会派名	議員数	所属議員の党派別内訳
自由民主党	31名	自由民主党31名
青和会	4	無所属4名
国民民主党	3	国民民主党3名
公明・健政会	3	公明党2名、無所属（公明党）1名
日本共産党	3	日本共産党3名
無所属	2	無所属2名
欠員	2	欠員2名

*2018年時点での数字。

*党派別内訳は前回選挙時の公認・推薦状況に基づくもの。

*所属議員5名以上の会派は交渉団体として、代表質問権および議会運営委員選出権が認められている。

出典：『青森県選挙管理委員会』。

自治法が制定され、県議選が行われる運びとなった。

本稿では、地方政治の名望家的存在である県議を分析の対象にしている。具体的には、第一部において、戦後青森県の都合18回にわたる県議選の概要と課題を検討する。その上で、第二部では、歴代正副議長の経歴（プロフィール）、県議選での得票数、および横顔を紹介する。これらの作業により、戦後青森県の政治を研究する際の、参考書＝資料として利用できれば幸いである。なお、巻末には参考資料として、戦後県議選の投票率、県議選での党派別当選者数、無投票当選者数、定数および選挙区の改定、並びに正副議長のデータなどを付記しておいた。記述にあたり、十分に調べたつもりであるが、もし間違いがあれば、ご指摘をいただき、訂正してより良い内容にしていきたい。



(2018年7月、県議会定例会での三村申吾知事の議案提案理由説明)

<総目次>

序文

第一部 県会議員選挙—概要と課題

- 第1章 1947年の県会議員選挙
- 第2章 1951年の県会議員選挙
- 第3章 1955年の県会議員選挙
- 第4章 1959年の県会議員選挙
- 第5章 1963年の県会議員選挙
- 第6章 1967年の県会議員選挙
- 第7章 1971年の県会議員選挙
- 第8章 1975年の県会議員選挙
- 第9章 1979年の県会議員選挙
- 第10章 1983年の県会議員選挙 (以上『専修法学論集』第134号, 2018年11月)
- 第11章 1987年の県会議員選挙
- 第12章 1991年の県会議員選挙
- 第13章 1995年の県会議員選挙
- 第14章 1999年の県会議員選挙
- 第15章 2003年の県会議員選挙
- 第16章 2007年の県会議員選挙
- 第17章 2011年の県会議員選挙
- 第18章 2015年の県会議員選挙
- 第19章 県会議員補欠選挙

結び (以上『専修大学社会科学年報』第53号, 2019年2月)

第二部 歴代正副議長—経歴・得票数・横顔

- 第1章 議長：櫻田清芽，副議長：中野吉太郎
- 第2章 議長：中島清助，副議長：中村清次郎
- 第3章 議長：大島勇太郎，副議長：阿部敏雄
- 第4章 議長：田澤吉郎，副議長：白鳥大八
- 第5章 議長：菅原光泊，副議長：外川鶴松
- 第6章 議長：小倉豊，副議長：中村拓道
- 第7章 議長：三浦道雄，副議長：藤田重雄
- 第8章 議長：三村泰右，副議長：米沢鉄五郎
- 第9章 議長：毛内豊吉
- 第10章 議長：白鳥大八，副議長：秋山皐二郎
- 第11章 議長：古瀬兵次，副議長：茨島豊蔵
- 第12章 議長：寺下岩蔵，副議長：秋田正
- 第13章 議長：小坂甚義，副議長：岡山久吉

- 第14章 議長：小野清七，副議長：工藤重行
 第15章 議長：中村富士夫，副議長：松尾官平
 第16章 議長：山田寅三，副議長：福沢芳穂
 第17章 議長：藤田重雄，副議長：成田芳造
 第18章 議長：秋田正，副議長：滝沢章次
 第19章 議長：菊池利一郎，副議長：佐藤寿
 第20章 議長：脇川利勝，副議長：神四平

(以上『専修法学論集』第135号，2019年3月)

- 第21章 議長：吉田博彦，副議長：中里信男
 第22章 議長：石田清治，副議長：毛内喜代秋
 第23章 議長：今井盛男，副議長：野沢剛
 第24章 議長：原田一實，副議長：森内勇
 第25章 議長：工藤省三，副議長：山内和夫
 第26章 議長：鳴海広道，副議長：芳賀富弘
 第27章 議長：小原文平，副議長：沢田啓
 第28章 議長：佐藤寿，副議長：清藤六郎
 第29章 議長：高橋長次郎，副議長：丸井彪
 第30章 議長：高橋弘一，副議長：長峰一造
 第31章 議長：毛内喜代秋，副議長：中村寿文
 第32章 議長：太田定昭，副議長：間山隆彦
 第33章 議長：秋田柁則，副議長：平井保光
 第34章 議長：富田重次郎，副議長：神山久志
 第35章 副議長：小比卷唯明
 第36章 議長：上野正蔵，副議長：小比類卷唯明
 第37章 議長：山内和夫，副議長：西谷冽
 第38章 議長：成田一憲，副議長：滝沢求
 第39章 議長：神山久志，副議長：大見光男
 第40章 議長：田中順造，副議長：清水悦郎
 第41章 議長：長尾忠行，副議長：中谷純逸
 第42章 議長：高樋憲，副議長：相川正光
 第43章 議長：西谷冽，副議長：森内之保留
 第44章 議長：阿部広悦，副議長：越前陽悦
 第45章 議長：清水悦郎，副議長：工藤兼光
 第46章 議長：熊谷雄一，副議長：山谷清文
 結び

<参考資料>

- ①戦後青森県議会議員選挙の投票率
 - ②戦後県議選の党派別当選者
 - ③戦後県議選の無投票当選者
 - ④戦後青森県の県議会議員定数、選挙区の変更
 - ⑤戦後青森県の正副議長のデータ
(就任年齢・当選回数・会派・平均得票数・選挙区・学歴)
 - ⑥戦後の県議会議員経験者で衆参議員・市町村長当選者
- あとがき

第二部 歴代正副議長—経歴・得票数・横顔



(第81代議長, 熊谷雄一: 2017年3月22日, 就任)

第1章 議長: 櫻田清芽, 副議長: 中野吉太郎 (1947年5月15日, 就任)

<目次>

1. はじめに
2. 櫻田清芽
3. 中野吉太郎
4. おわりに

1. はじめに

戦後第一回目の県議選は、1947年4月30日に行われ、その結果は、党派別でいうと、自由党18人、民主党17人、社会党5人、国協党2人、および無所属5人の内訳で定数47がうまった。その後、自由党の切り崩しが展開され、民主党は24人、一方、自由党は18人となった。

正副議長を決める臨時県議会―「組織会」は5月5日に招集され、紆余曲折があったものの、議長には、民主党で弘前市選出の当選4回の櫻田清芽（61歳）を、また副議長には、同じく民主党で、上北郡選出の当選2回の中野吉太郎（68歳）を選んだ。第二部では、第一部の県議選の概要と課題を踏まえて、戦後歴代正副議長たちの輪郭（経歴、県議選での得票数、および横顔）を紹介する。

2. 櫻田清芽

① 経歴

櫻田清芽は1885年11月22日、弘前市の植田町に生まれた。県立弘前中学から明治大学予科に進学。1910年、陸奥日報社に入社。以後30余年におよぶ記者生活を送り、陸奥日報社編集長、弘前新聞主筆兼社長を務めた。1921年、弘前市議会議員に当選、以来市議会議員を20年かねて、1931年9月、県議選に当選すること4期。この間、1944年には副議長、1947年には、議長に就任。1951年に、満期退職。同年4月、弘前市長に転身して当選、これを1期務めた。県公安委員長、弘前青果株式会社社長などを歴任。1958年12月31日に死去、享年73であった（笹森貞二『弘前市長列伝』〔津軽書房、1988年〕、86頁、『青森県議会史 自昭和21年～至昭和27年』〔青森県議会、1959年〕、991頁）。

② 県議選での得票

・1931年9月25日の県議選 2,203票（第一位） 政友会

・ 1935年 9月25日の県議選	2,898票（第一位）	々
・ 1939年 9月25日の県議選	1,717票（第一位）	々
・ 1947年 4月 5日の県議選	7,405票（第一位）	国民協同党
（平均得票数）	3,556票（小数点以下四捨五入）	

③ 横顔

県会議長に就任した櫻田は、旧津軽藩の士族の出身である。櫻田は、ネプタ喧嘩で鳴らしたかつての壮士であって、新聞人として陸奥日報（青森日報の前身）編集長、また弘前新聞社長（主筆）の経歴を有する筆の人である。しかし、寸鉄人をさす弁舌でも有名である。弘前市議会議長を務めた後、県議に4回当選。議長当選時は61歳で、後に弘前市長選に出馬して当選、1期務めた。櫻田は古武士の面影があり、地方政界の重鎮として長期にわたって活躍した（『両議長の横顔』『東奥日報』1947年5月16日、『青森県人名大事典』〔東奥日報社、1969年〕、266頁）。

3. 中野吉太郎

① 経歴

中野吉太郎は1880年12月3日、上北郡七戸町に生まれた。尋常小学校卒。1919年、中吉合資会社を設立。1924年以來、七戸町会議員に3期当選。1939年9月、県議選に出馬して当選、3期務めた。この間、1947年5月、副議長に就任。1931年、製材兼木材商開業、1946年、県林産組合理事、上北郡地区製材業組長、東北木材商事株式会社監査役などを歴任。1949年、副議長在職中に死去、享年69であった（『青森県議会史 自昭和21年～至昭和27年』〔青森県議会、1959年〕、993頁）。

② 県議選での得票

・ 1939年 9月の県議選	2,184票（第三位）	民政党
----------------	-------------	-----

・1947年4月の県議選	5,683票（第四位）	民主党
・1951年4月の県議選	5,112票（第三位）	々
（平均得票数）	4,326票	

③ 横顔

中野吉太郎は、七戸町出身であり、町会議員を経て、県議を3期務めたにすぎないものの、県政界に隠然たる勢力を持ち、また民主党内でもその発言力はよく壮年議員を押さえ、副議長就任時は老齢68歳の県会最長年者だった。白髪横顔は、接する人には政治家と思う好印象を与えた温厚誠実の人で、農林業を営み林政方面には一見識を持っていた、という（「両議長横顔」『東奥日報』1947年5月16日）。

4. おわりに

新しく選出された県議の会派構成は、自由党18人、民主党17人、社会党5人、国協党2人、無所属5人であった。しかし、津島文治・知事は民主党であったので、自由党への切り崩し工作が行われ、その結果、民主党24人、自由党18人となり、民主党が第一党＝与党となった。

議長候補として、党籍離脱を条件に国協党の櫻田清芽が浮上、議長は自由党からでなく、民主党から出すことになった。だが、南部地方から中野吉太郎を担ぐ動きが生じ、党内で櫻田か中野かで激論となった。しかし最終的に、議長、副議長を2ヵ年交代とすることで了承、桜田が先に2年、残り2年を中野が就任することで決着を見た（『東奥日報』1947年5月16日、『青森県議会史 自昭和21年～至昭和27年』〔青森県議会、1959年〕、35頁）。

第2章 議長：中島清助，副議長：中村清次郎（1951年5月10日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 中島清助
3. 中村清次郎
4. おわりに

1. はじめに

戦後二回目の県議選は、1951年4月30日に行われた。その結果は、自由党22人，民主党12人，社会党右派3人，社会党左派2人，社革1人，無所属10人という配置となった。ただ，中央政界で民主党が改進黨に移行したのに伴い，民主党の県支部も改進黨に移行し，また3人の議員が自由党に入党。そこで，県議会の構成は，自由党25，改進黨11，社会党6，無所属8議席という配置となり，自由党が議会で過半数を制することになった。

5月10日に招集された臨時県議会―「組織会」は，舞台裏でもめたものの，最終的に自由党が押し切り，議長には自由党で三戸郡選出の当選3回目の中島清助（53歳）を，また副議長には，同じく自由党で西津軽郡選出の当選2回目の中村清次郎を（52歳）選んだ（「議長は中島氏当選」『デーリー東北』1951年5月11日）。

2. 中島清助

① 経歴

中島清助は1898年7月7日，下北郡の田名部町に生まれた。田名部尋常高等小学校卒。田名部町会議員，同議長に就任。1939年，県会議員に転身して当選，通算3期務めた。1950年に，副議長を，また1951年から1955年まで議長を務めた。1957年，県畜連会長に，また自民党県連会長，県りんご振興会社社長などを歴任。家業は酒造業および海産物商で，干シアワビの海外輸出で知られる。1982年4月14日に死去，享年83であった（『青森

県人名大事典』〔東奥日報社, 1969年〕, 799頁)。

② 県議選での得票

・1939年9月の県議選	3,135票 (第一位)	政友会
・1947年4月の県議選	4,848票 (第三位)	自由党
・1951年4月の県議選	5,245票 (第四位)	々
・1955年4月の県議選	8,522票 (第一位)	々
(平均得票数)	5,438票	

③ 横顔

中島清助は田名部町(現・むつ市)出身である。尋常高等小学校卒業後、酒造・呉服を主業とする家業に従事。26歳で頭角を現し、大湊電灯株式会社取締役や日中貿易海産商を営む青年実業家となった。1929年、田名部町議に当選。1939年には、県議に転身して当選、4期務める。1951年、議長に就任。敗戦の1945年、下北一円の食糧事情が悪化し、「米よこせ運動」で危機打開に参画。また1952年には、米占領軍の「関根演習地拡張反対」に立ち上がった。政友会、自由党を経て、自民党に所属、県政界の重鎮である(『青森県人名事典』〔東奥日報社, 2002年〕, 479頁)。

3. 中村清次郎

① 経歴

中村清次郎は1899年4月21日、西津軽郡鰺ヶ沢町に生まれた。西海高等所小学校卒。1930年、鰺ヶ沢町会議員に当選、1944年まで町議。1947年、県議に転身して当選、連続3期務め、この間1951年には、副議長に就任。1959年、鰺ヶ沢町長選に出馬して当選、これも連続3期務めた。鰺ヶ沢商業組合理事長、県業連会長などに就任した。1975年に死去、享年76であった(『青森県人名大事典』〔東奥日報社, 1969年〕, 801頁, 『青森県議会史 自昭

和21年～至昭和27年』〔青森県議会，1959年〕，994頁）。

② 県議選での得票

・1947年4月の県議選	6,584票（第二位）	民主党
・1951年4月の県議選	5,101票（第二位）	自由党
・1955年4月の県議選	5,921票（第一位）	々
（平均得票数）	5,869票	

③ 横顔

中村清次郎は鱈ヶ沢町の出身である。早くから政治家を志し、西海岸青年同志会に入って活動。鱈ヶ沢町議を経て、1947年から県議員に当選、連続3期務め、1951年副議長に就任。その後、鱈ヶ沢町長を3期務めた。県漁連会長、県水産会の要職を歴任。自民党県連政調会長などを務めた。中村は、若い頃から俳句に親しんでいた、という（『青森県人名大事典』〔東奥日報社，1969年〕，487頁，『青森県議会史 自昭和21年～至昭和27年』〔青森県議会，1959年〕，994頁）。

4. おわりに

臨時県議会が1951年5月10日に招集され、「組織会」では、楽屋裏でもめにもめ、議長に自由党の中島清助を、そして副議長に、同じく自由党の中村清次郎を選出した。これは中立系が同調した結果で、改進黨、社会党は独自の立場をとった。この議長選挙を契機に以後、中立系は是々非々主義の立場をとるようになったものの、後に自由党に同調する（『青森県議会史 自昭和21年～至昭和27年』〔青森県議会，1959年〕，397頁，『デーリー東北』1951年5月11日）。

第3章 議長：大島勇太郎，副議長：阿部敏雄（1955年5月13日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 大島勇太郎
3. 阿部敏雄
4. おわりに

1. はじめに

戦後三回目の県議選は、1955年4月23日に行われた。結果は、定数50の中で過半数を占める政党が存在せず、多数派工作の結果、最終的な議席配分は、民主党21，自由党15，左派社会党4，右派社会党2，および県政クラブ8に落ち着いた。

新しい議会では、多数派が存在せず、そのため、正副議長の選出は困難を極めた。しかし、最終的に正副議長には、比較第1党である民主党で八戸市選出の当選5回を数える大島勇太郎（55歳）と、同じく民主党で北津軽郡選出の当選2回を数える阿部敏雄（57歳）を選んだ（「県正副議長誕生の瞬間―野党の策戦奏功す」『デーリー東北』1955年5月14日）。

2. 大島勇太郎

① 経歴

大島勇太郎は、1900年1月25日、上長苗代村（現・八戸市）に生まれた。県立八戸中学卒，早稲田大学中退。1929年，上長苗代村議。1930年，県議に初当選。1936年10月，山内亨派の選挙違反に連座して県議失格，1936年の県議選は不出馬。1947年に県議選で復帰したものの，米軍政部との関係で辞職。1951年には県議4選，1967年まで通算7期務めた。この間1955年，議長に就任。県農協中央会会長，自民党県連総務会長などを歴任。1974年に死去，享年75であった。息子の理森も県議を経て，衆議院議員となり，現在，衆議院議長である（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，95頁，

『青森県議会史, 自昭和16年～至昭和20年』〔青森県議会, 1974年〕, 935頁)。

② 県議選での得票

・1930年4月の県議補欠選〈三戸郡〉	5,177票 (第一位)	民政党
・1935年9月の県議選	々 2,138票 (第二位)	々
・1947年4月の県議選	々 4,880票 (第三位)	民主党
・1951年4月の県議選	々 6,329票 (第一位)	無所属
・1955年4月の県議選	々 5,574票 (第二位)	々
・1959年4月の県議選〈八戸市〉	8,702票 (第三位)	自民党
・1963年4月の県議選	8,472票 (第六位)	々
(平均得票数)	5,896票	

③ 横顔

大島勇太郎は上長苗代村(現・八戸市)の出身である。県立八戸中学を経て、早稲田大学に進むも中退、家業の農業に従事。若くして政治の道に入り、1929年、上長苗代村議。1930年、県議に当選7期務める。1955年、議長に就任。大島は林業や治山に尽力した、という。県治山林道会長、県農協中央会会長などを歴任。政治はもとより、面倒見のよい人柄で多くの人望を得た(『青森県人名事典』〔東奥日報社, 2002年〕, 95頁)。

3. 阿部敏雄

① 経歴

阿部敏雄は1898年、羽野木沢村(現・五所川原市)に生まれた。青森師範卒後小学校教員となり、沿川小学校校長などを務めた。1947年、県会議員に初当選、1955年、再選。この間、1955年には、副議長に就任。リングを中心とする醸造販売業に従事。ラジオ青森監査役、自民党県連幹事長などを歴任。1968年に死去、享年71であった(『青森県人物大事典』〔東奥日报社,

1969年], 15～16頁)。

② 県議選での得票

・1947年4月の県議選	6,660票 (第二位)	自由党
・1955年4月の県議選	7,148票 (第三位)	民主党
(平均得票数)	6,904票	

③ 横顔

阿部敏雄は、羽野木沢村出身である。青森師範学校卒、沿川中学校校長を務めた。以後、リングジュース、リング酒の販売に従事。1947年県議に当選、1955年、再選。副議長に就任。自民党県連幹事長、ラジオ青森の監査役などを歴任した(『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、16頁)。

4. おわりに

1955年5月12日に招集された臨時県議会—「組織会」では、議長選挙で大混乱となった。最終的に議長は民主党の大島勇太郎に、また副議長は阿部敏雄に決まったものの、その過程で自由党や県政クラブは本会議を総退場するという事態を招いた。

正副議長の選出は、民主党、左社、右社の一部議員が結束、強行突破作戦の拳にでたことが功奏し、正副議長とも民主党によって占められた。その背景には、県議会で第一党が野党(自由党)で、与党(民主党)が第二党であるという“ネジレ現象”があったからだ。そのため、議長選出の駆け引きが繰り返され、民主党(20人)、左派社会党(4人)右派社会党(1人)の25人の議員のみで正副議長の選挙を行うという、好ましくない新例を作った(「県正副議長誕生の瞬間—野党の策奏功す」『デーリー東北』1955年5月14日、「社説：遺憾な県議会議長選任」『東奥日報』1955年5月14日)。

第4章 議長：田澤吉郎，副議長：白鳥大八（1957年12月20日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 田澤吉郎
3. 白鳥大八
4. おわりに

1. はじめに

1957年12月20日の第52回県議会定例会では、「明治乳業嘆願書」問題を契機に、議長の大島勇太郎と副議長の阿部敏雄が更迭，新しい正副議長には，自民党で南津軽郡選出の当選3回を数える田澤吉郎（39歳），同じく自民党で青森市選出の当選2回目の白鳥大八（49歳）が決定した。

11月に招集された県議会の第51回定例会では，畜産振興の譲渡問題を巡って明治乳業と雪印乳業などの大資本が介在，その対立が議会内に波及，正副議長の更迭となったのだ。明治乳業に対しても酪農振興の役割を与えるべきだという議論は，県南部選出議員の中にあつた。9月の定例会では，経済常任委員会が明治乳業の請願書を採択したことを契機に，11月定例会が開催，旧自由党系に津軽地方の旧民主党系が合流，当該問題に最も関与した“明治派”の大島勇太郎・議長を追及する声が生じた。その背景には，“雪印派”の津島前知事の策動があつた，と見られている。

この時は，常任委員会の改組時であり，これも絡んで自民党内は動揺，雪印派と目される議員が本会議を欠席，会期4日間中，議会は空転するなど，県民から強い批判を浴びた。この責任をとり，正副議長が辞意を表明するに至つたのである。

県議会の第52回定例会が12月17日に招集，20日には，大島議長と阿部副議長の辞表を受理，直ちに選挙を行い，議長には田澤吉郎，副議長には白鳥大八を選出した。田澤は県議会議員3期目で弱冠39歳，県政史上例のない若さで議長に就任。田澤の妻は津島文治・前知事の長女で，田澤は津島

文治の娘婿にあたる。田澤は後に、衆議院議員に転身・当選、農林大臣などを務め、自民党の重鎮として県政界に多大な影響力を行使した（詳細は藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、第一部第13章を参照）。

2. 田澤吉郎

① 経歴

田澤吉郎は1918年1月1日、南津軽郡田舎館村に生まれた。東奥義塾高校を経て、早稲田大学政経学部卒。1947年に県議当選、以後3期連続当選。1957年、39歳の若さで議長に就任。1960年、衆議院議員に転身して当選。以後12期36年にわたり国政に尽力、国土庁長官、農林大臣、および防衛庁長官を歴任。県政界内では「田竹時代」を担い、大きな政治力を発揮。議員引退後は、東奥義塾理事長や弘前学院大学学長などを務めた。2001年に死去、享年83であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、404頁）。

② 県議選での得票

・1947年4月の県議選	5,984票（第一位）	民主党
・1951年4月の県議選	5,553票（第五位）	自由党
・1955年4月の県議選	8,479票（第一位）	々
（平均得票数）	6,672票	

③ 横顔

田澤吉郎は田舎館村の出身である。父は豪農で村の指導者周助、吉郎はその11男である。東奥義塾を経て、1943年、早稲田大学政経学部政治学科を繰り上げ卒業。1947年県議初当選、以後3期連続当選。1957年、弱冠39歳の時議長に就任。1960年、42歳で衆議院議員に当選、以後、連続12期36年間にわたり国政に尽力した。

田澤は豪農の出で、前知事・津島文治の娘ムコとして知られる。津島県政時代は遠慮して一度も質問に立たなかった、という。その人柄は六尺の長身に似あわず童顔とともに至って温厚で、良家の育ちを思わせる。正論を通す人柄が好感を呼び、それが田澤をして、「温厚・誠実な天性の大衆政治家」といわせる所以である（『東奥日報』1952年12月21日、前掲書『青森県人名事典』、404頁）。

3. 白鳥大八

① 経歴

白鳥大八は1912年8月20日、荒川村（現・青森市）に生まれた。早稲田大学法学部卒業後、損保会社（安田火災海上保険会社）に勤務したものの、1944年戦災で帰郷。戦後1947年、荒川村長に当選。1951年、県議に初当選、1967年まで連続5期当選。この間、1957年に副議長、1967年には議長を務めた。1958年には衆議院総選挙に、また1971年には青森市長選に出馬したものの、いずれも落選している。県信用組合の理事長などに就任。1989年に死去、享年77であった（前掲書『青森県人名事典』、340頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選（東津軽郡）	4,550票（第一位）	自由党
・1955年4月の県議選（青森市）	8,047票（第三位）	民主党
・1959年4月の県議選	々	8,451票（第六位） 自民党
・1963年4月の県議選	々	8,300票（第五位） 々
・1967年4月の県議選	々	9,450票（第二位） 々
（平均得票数）	7,760票	

③ 横顔

白鳥大八は、青森市荒川の旧家の出身である。早稲田大学法学部卒業後、

安田火災海上に勤務。その後帰郷、早くから政界入りし、34歳で旧荒川村長に当選。38歳の時、県議に転身して当選。スポーツマンとして知られ、県議団野球チームの選手で投手を務めた。地味な人柄だが、誠実で頭も切れる、という。県町村会長、下湯温泉社長、県信用組合協会会長などを歴任（『陸奥新報』1967年5月7日、『東奥日報』1967年5月7日）。

4. おわりに

1957年12月17日に招集された県議会の定例会では、議長の選任問題が正式に日程に上り、12月20日、正副議長の辞任を承認、続いて正副議長の選挙に移り、その結果、自民党の田澤吉郎と白鳥大八が正副議長に当選。当初、議長候補には、菅原光珀や中村清次郎がのぼったものの異論が出た。この際、斬新な空気を議会内に注入すべきである声が生じ、3期当選した議員で最年少の田澤に落着き、39歳という県政史上例のみない若い新議長が実現した（「県議会」『東奥年鑑 昭和33年版』〔東奥日報社、1958年〕、31頁）。

第5章 議長：菅原光泊、副議長：外川鶴松（1959年5月8日、就任）

<目次>

1. はじめに
2. 菅原光泊
3. 外川鶴松
4. おわりに

1. はじめに

戦後四回目の県議選は1959年4月23日に実施、51人の当選者が決定した。当選直後の色分けは、自民党35人、社会党4人、無所属12人（保守系10人、革新系2人）であった。今回の選挙では、元県議の返り咲きも含めて新人議員は26人に達し、定数の過半数を占めた。自民党と社会党の二大政党下（「55年体制」）における最初の選挙であり、5月8日に招集された臨時県

議会―「組織会」の空気は、派閥争いの醜態もなく、スムーズに正副議長の選任から常任委員会の割り当ても行われた。その背景には、従来当選していた議員が演じる議長選挙が世論のひんしゆくを買ったことで、“既成政治家”からの脱皮を強く意識した新人議員が多かったからだ。

5月に招集された臨時会―「組織会」で、議長には、自民党で十和田市選出の当選4回の菅原光泊(61歳)を、また副議長には、同じく自民党で北津軽郡選出の当選3回の外川鶴松(56歳)を選んだ。自民党は40人中16人の新人議員を抱え、新人団が一致団結して党内調整に大きな役割を演じた。議長選挙では、新人団から「一部幹部によってのみ議会の人事をいじくりまわすのはよくない」という意見がでた。新しい議員団は次のような要望書を作成、中島清助・議員総会長につきつけた。①正副議長は希望者の立候補制をとり、全員の投票で決めること、②経験者は除くこと、③任期は2ヵ年とすること(藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、93～94頁)。

2. 菅原光泊

① 経歴

菅原光泊は1898年7月23日、三本木村(現・十和田市)に生まれた。1919年、県立八戸中学を卒業。1929年、三本木町議員に当選、4期務め、1947年、議長に就任。1947年、県議に転身、上北郡選挙区で民主党から出馬して当選、通算5期務めた。その間に1959年、議長に就任。また、県教育委員会委員、県交通安全協会会長、東北合板会社社長などを歴任。自民党県連総務副会長。1968年に死去、享年70であった(『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、347頁)。

② 県議選での得票

・1947年4月の県議選(上北郡) 7,282票(第一位) 民主党

・1954年11月の県議補選	々	17,933票（第一位）	々
・1955年4月の県議選	々	7,975票（第一位）	々
・1959年4月の県議選（十和田市）		6,348票（第二位）	自民党
・1963年4月の県議選	々	6,586票（第二位）	々
（平均得票数）		9,224票	

③ 横顔

菅原光泊は三本木村出身である。県立八戸中学を卒業。三本木町議員、町議通算4期、同議長。その後、県会議員に転身して当選、通算5期務めた。1959年5月、60歳の時、議長に就任。議長就任にあたり、次のように語った。「とにかく公平にやる。それ以外にない。円滑な運営を図るため、まとめ役として充分職責を全うしたい」（『東奥日報』1959年5月9日）。菅原は県政界の長老として活躍、地方自治の発展に大きく貢献。自民党県連副総務などを務めた（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、347頁）。

3. 外川鶴松

① 経歴

外川鶴松は1903年10月11日、北津軽郡板柳町に生まれた。高等尋常小学校卒、1937年、板柳町会議員に当選。1951年、県議に転じて初当選、以後連続5期当選。この間、1959年から1961年まで副議長を務めた。板柳町農協組合長、県りんご振興株式会社、県りんごジュース株式会社監査役、自民党県連副会長に就任した。1971年9月1日に死去、享年68であった（『青森県議会史 自昭和26年～至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕、1109頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選	6,839票（第三位）	社会革新党
・1955年4月の県議選	7,989票（第二位）	自由党

・1959年4月の県議選	9,178票（第二位）	自民党
・1963年4月の県議選	7,748票（第二位）	々
・1967年4月の県議選	8,841票（第二位）	々
（平均得票数）	8,119票	

③ 横顔

外川鶴松は板柳町出身である。板柳町議を経て、1951年、県議に当選、連続5期当選。この間、1959年に副議長に就任。県議在任中、板柳町農協組合長として、農家の生活向上に尽力、1952年には、板柳町立高校の県立移管に活躍するなど、政治家としてその功績が称えられ、勲四等瑞宝章、従5位を受ける（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、370頁）。

4. おわりに

第41回臨時県議会は1959年5月8日に招集、「組織会」で波乱もなく、議長に十和田市選出の自民党・菅原光泊を、また副議長に、北津軽郡選出の自民党・外川鶴松をすんなりと選出した。既述のように、簡単に話し合いがついたのは、自民党の新人議員たちが、議長選出に際して、むやみに時間を引き延ばす愚を避け前職に遠慮してもらい、任期を二カ年にするなどの内容の要望書の中島清助・議員総会会長に伝えたことなどが、人選を早める結果となった（『県議会』『東奥年鑑 昭和43年版』〔東奥日報社、1959年〕、34頁）。

第6章 議長：小倉豊，副議長：中村拓道（1961年10月30日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 小倉豊
3. 中村拓道
4. おわりに

1. はじめに

1961年5月の県議会定例会は、工専誘致問題と議長交代劇で大きくもめた。5月22日、県議会の第66回定例会が招集。正副議長の交代問題で会期延長したものの、自民党的意思不統一により結論を得ることができないまま閉会。そこで7月20日、第46回臨時会を開会。だが、青森、八戸への工専誘致合戦をめぐって大混乱。また、第46回臨時議会の開会に先立って自民党県議員団内で、正副議長の交代問題がこじれ、菅原光珀、外川鶴松の正副議長が自民党県議員団を離脱（党籍はそのまま）、22日の開会冒頭、正副議長不信任案の提出が検討され、「正副議長は円満に交代する。時期は次期県議会冒頭とする」、ことで話し合いがついた。

県議会の第67回定例会を前に、9月26日、自民党県議員団は一本化に成功。しかし、議案審議の方はおろそかとなり、またもや正副議長交代問題は未解決のままに自然閉会し、正副議長の交代問題を解決できなかった。打開をはかるべく、10月30日、第48回臨時会を招集、その冒頭、菅原、外川正副議長が辞任。後任には内定していた自民党で南津軽郡選出の当選3回を数える小倉豊（47歳）が議長に、同じく自民党で八戸市選出の当選3回の中村拓道（50歳）が副議長に就任した。これまで自民党は、議長二年交代の「党内密約」を実現することに力を注いできた。だが、その結果が今回のように重要な審議をそっちのけで、党内政治一結束の弱さに振り回されて醜態を演じたのは遺憾であった（以上、藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、106頁）。

2. 小倉 豊

① 経歴

小倉豊は1914年6月1日、五郷村（現・浪岡町）に生まれた。東奥義塾3年中退。職業は農業で1942年、五郷村村議に当選。1947年には五郷村長。1951年県議に転身して当選、連続5期務めた。この間、1961年から1963年

まで議長に就任。県海外移民協会会長，日本海外協会連合会理事などを歴任。自民党県連総務など務めた。1977年に死去，享年63であった（『青森県議会史 自昭和28年～至昭和34年』〔青森県議会，1960年〕，1114頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選	5,340票（第六位）	無所属
・1955年4月の県議選	6,443票（第五位）	民主党
・1959年4月の県議選	8,006票（第三位）	自民党
・1963年4月の県議選	9,655票（第一位）	々
・1967年4月の県議選	6,584票（第三位）	々
（平均得票数）	7,206票	

③ 横顔

小倉豊は五郷村の出身である。東奥義塾を中退，五郷村村議，五郷村長を経て，1951年から県議に4期連続当選。1961年10月30日，県会議長に就任した。議長になるのに三回も待ちぼうけを食わされた，という。晴れて議長となった小倉は次のように述べた。

「議長に推されたことは身にあまる光栄だ。私は浅学非才，議会のこの重大な責任を全うすることができるかどうか危惧の念をもつが議会のみなさまの援助をたまわって，本県の諸行政，諸施策の健全な議会運営を通じて，寄与していきたい」（「県議会—正副議長が交代」『東奥日報』1961年10月31日）。

3. 中村拓道

① 経歴

中村拓道は1911年4月22日，青森市に生まれた。苦学して県立青森中学，青森師範学校を卒業，上北郡の小学校教師となった。戦後，進駐軍三沢維

持管理事務所長を経て、1950年、山崎岩男・労働政務次官秘書。1951年、県議に転身し4期連続当選。この間、1961年、副議長に就任。1965年、八戸市長に出馬して当選。また1969年には、衆議院議員に当選、1972年も連続当選。しかし、2期目の任期中の1974年に死去、享年63であった。自民党県連総務、同政調副会長などを歴任した（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、487頁、『青森県議会史 自昭和28年～至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕、1113頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選	6,785票（第二位）	民主党
・1955年4月の県議選	11,370票（第一位）	々
・1959年4月の県議選	8,133票（第五位）	自民党
・1963年4月の県議選	12,888票（第二位）	々
（平均得票数）	9,794票	

③ 横顔

中村拓道は、青森市出身である。幼少の頃父母に死別。苦学して青森中学、青森師範学校を卒業後、10年間教師を務めた。1941年県庁に入り、職業科拓務主事。戦後1946年4月、三戸地方事務所涉外課長、進駐軍三沢維持管理事務所長などを経て、1949年3月、山崎岩男・労働政務次官秘書。1951年、県議に当選し連続4期務めた。1961年10月、副議長に就任。その後、八戸市長選に出馬して当選、1期務めた。1969年、衆議院議員に当選、2期務めた。

ちなみに、八戸市長選には無所属で出馬、労働者を含めた多様な市民を味方につけた「八戸方式」（保守勢力が革新系と手を組み、「保革連合」で現職を打ち破る戦略）により、市長3期目の岩岡市長を破り当選。八戸市長時代は「大衆政治家」だと称され、福祉施設の整備拡張に尽力した

(『青森県人名事典』〔東奥日報社, 2002年〕, 487頁)。

4. おわりに

今回の新議長誕生は難産だった。5月に表面化した正副議長交代劇は、自民党の「内部不統一」で、県議会を混乱の極に導き、県民から大きな不信感を招いた。しかし、ようやく話し合いがつき、10月30日、小倉豊、中村拓道の正副議長が決まった。約半年間、県議団の分裂で議会運営は混乱。そこで新議長の下で、議会の正常化が期待された(「県議会—正副議長が交代」『東奥日報』1961年10月31日、「難産だった新議長誕生—自民党、醜態の連続」『陸奥新報』1961年11月1日、詳細は「県議会」『東奥年鑑 昭和37年版』〔東奥日報社, 1962年〕, 37~38頁に詳しい)。

第7章 議長：三浦道雄(1963年5月4日, 就任), 副議長：藤田重雄 (同年5月5日, 就任)

<目次>

1. はじめに
2. 三浦道雄
3. 藤田重雄
4. おわりに

1. はじめに

戦後五回目の県議選は、1963年4月17日に行われた。52の定員に、98人が立候補。選挙の結果、自民党37人、社会党6人、民社党1人、共産党2人、無所属6人が当選。自民党と社会党が伸び悩んだのに対して、共産党が2人を当選させて健闘した。

5月4日、県議会の臨時会が招集され、「組織会」で新しい正副議長を選出。議長には、自民党で三戸郡選出の5期目の三浦道雄(48歳)が、また副議長には、翌5日に、自民党で弘前市選出の3期目の藤田重雄(57

歳)が就任した。議長職をめぐるのは、第一区(南部)と第二区(津軽)で2年交代が慣例となっており、5期目の三浦と上北郡選出の三村泰右(自)の就任が焦点となったものの、まず先に三浦が議長に、そして2年後に、三村が議長に就任することで決着を見た(「議長に三浦氏選出、副議長、あすに持越し」『デーリー東北』1963年5月5日)。

2. 三浦道雄

① 経歴

三浦道雄は1918年11月12日、南部の五戸町に生まれた。県立八戸中学、盛岡高等農林、法政大経済学部、および海軍経理学校卒。戦後1947年、五戸町会議員に当選、議長を務めた。1948年の県議選補欠選では、民主党公認で三戸郡選挙区から県議に初当選、1951年から9回当選(1971年落選、1975年に返り咲く)するなど、長期間にわたり県議として活動。その間、1967年から1969年まで議長を務めた。五戸町商工会長、南部鉄道株式会社社長、自民党県連副会長などを歴任。1993年に死去、享年74であった(『青森県人名大事典』〔東奥日報社、1969年〕、828頁)。

② 県議選での得票

・1948年8月の県議補選	8,256票(第一位)	民主党
・1951年4月の県議選	5,973票(第二位)	々
・1955年4月の県議選	4,470票(第五位)	々
・1959年4月の県議選	8,926票(第一位)	自民党
・1963年4月の県議選	6,438票(第四位)	々
・1967年4月の県議選	8,096票(第二位)	々
・1975年4月の県議選	10,934票(第一位)	々
・1979年4月の県議選	12,011票(第三位)	々
・1983年4月の県議選	13,654票(第一位)	々

(平均得票数) 8,751票

③ 横顔

三浦道雄は1918年生れで、五戸村の出身である。五戸町議、同議長。1948年に県議補選で当選、以後通算9期の長期にわたり県議を務めた。その間、48歳で議長に就任、議会運営に尽力、県政界の長老として活躍した。また、事業家として1960年から1993年に死去するまで南部鉄道・バス会社の社長・会長に就任。五戸町商工会会長、農業組合理長などを歴任。三浦は三戸郡地方の経済および農業の多方面で大きな功績を残した（『青森県人名事典』〔東奥日報、2002年〕、653頁）。

3. 藤田重雄

① 経歴

藤田重雄は1906年5月15日、高杉村（現・弘前市）に生まれた。青森師範二部卒。1944年まで小学校教員を務めた。1944年高杉村長。1955年、県議に転身して当選、1983年まで通算6期務めた。この間、1963年に副議長。1967年に落選するも1971年に返り咲く。1977年には議長に就任。県リング振興株式会社取締役、自民党県連政調会長などを歴任。1995年に死去、享年89であった（『青森県議会史 自昭和28年～至昭和34年』〔青森県議会、1960年〕、1112～1113頁、『青森県人名大事典』〔東奥日報社、1969年〕、821頁）。

② 県議選での得票

・ 1955年4月の県議選	5,923票（第三位）	無所属
・ 1959年4月の県議選	7,224票（第五位）	自民党
・ 1963年4月の県議選	8,490票（第二位）	々
・ 1971年4月の県議選	17,815票（第一位）	無所属
・ 1975年4月の県議選	15,657票（第一位）	自民党

・1979年4月の県議選	14,396票（第二位）	々
（平均得票数）	11,584票	

③ 横顔

藤田重雄は1906年生まれで、高杉村出身である。青森師範学校を卒業、小学校教員を務めた後、1944年、高杉村長。1955年、県議に初当選、通算6期当選。この間、副議長、議長に就任した。1965年、長年地方自治に尽力した功により、県褒章。1983年には地方自治功労で勲三等瑞宝章を受章、1995年には、正五位に叙せられた（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、602～603頁）。

4. おわりに

冒頭でも指摘したように、議長の選任は自民党内の事情で、三浦道雄議員（5期）と三村泰右議員（5期）が争い、最終的に紛争回避策として、三浦議員と三村議員が2年で交代することで決着、三浦議員が議長に選出された。一方、副議長は、比較的スムーズに進み、慣例により当選3期で第二区の藤田重雄（弘前市選出）が就任した（「議長の三浦氏選出」『デーリー東北』1963年5月5日、『陸奥新報』1963年5月7日、「県議会」『東奥年鑑昭和39年版』〔東奥日報社、1964年〕、48頁）。

第8章 議長：三村泰右（1964年6月19日、就任）、副議長：米沢鉄五郎（1965年6月11日、就任）

<目次>

1. はじめに
2. 三村泰右
3. 米沢鉄五郎
4. おわりに

1. はじめに

県議会第78回定例会は1964年6月18日に開会、会期を10日間と決めた。議会初日、竹内俊吉・知事が提案理由を説明した後、三浦道雄・議長が辞表を提出し、この取り扱いをめぐる各派交渉委員会がもめた。社会党と共産党の両党は、「議長ポストを政治的取引の具にしている」と反対して食い下がった。結局、再開後の本会議で議長の辞職は承認され、後任の新しい議長に、自民党で上北郡選出の当選5回の三村泰右（67歳）を選んだ。

越えて、1965年6月1日、県議会の第82回定例会が開会、最終日の6月11日、自民党は副議長の交代で紛争したものの、自民党で青森市選出の当選3回の米沢鉄五郎（69歳）を選んだ（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、121～122頁、「県議会」『東奥年鑑 昭和40年版』〔東奥日報社、1965年〕、34頁、「県議会」『東奥年鑑 昭和41年版』〔東奥日報社、1966年〕、38頁、『東奥日報』1964年6月19日、1965年6月12日）。

2. 三村泰右

① 経歴

三村泰右は1897年10月29日、南部地方の上北郡百石町に生まれた。高等小学校卒。1933年、百石町議員に当選、以後連続3期当選。1947年、県議に転身して当選、1951年に落選。1954年、県議補選で返り咲く。1955年から連続3期当選（通算5期）。1964年から1965年まで議長を務めた。自民党県連幹事長、上北土建協会会長などに就任。1991年に死去、享年94であった（『青森県議会史 自昭和38年～至昭和41年』〔青森県議会、1983年〕、1460頁）。

② 県議選での得票

- ・1947年4月の県議選 6,898票（第二位） 自由党
- ・1954年11月の県議補選 14,876票（第二位） 々

・1955年4月の県議選	7,705票（第二位）	民主党
・1959年4月の県議選	7,500票（第三位）	自民党
・1963年4月の県議選	8,783票（第二位）	々
（平均得票数）	9,152票	

③ 横顔

三村泰右は1897年生まれで、百石町出身である。1933年、百石町議に当選し3期務め、長年にわたり町政に参与した。1947年、県議当選、1965年まで5期務めた。この間、1964年には、議長に就任。県農協中央会長など農業団体の長として農業振興に尽力。また県将棋連盟相談役、土木建築業の三村興業社長などを歴任。1989年、百石町名誉市民となる。県議の三村輝文は息子、また現知事の三村申吾は孫である（『青森県人名事典』〔東奥日報、2002年〕、669頁）。

3. 米沢鉄五郎

① 経歴

米沢鉄五郎は1896年7月15日、油川町（現・青森市）に生まれた。高等小学校卒。1921年、県巡査拝命。1932年、県刑事課長。1937年、弘前市警察署長に就任。1945年、青森市助役。1951年、青森市議当選。1955年、県議に転身して当選、これを連続3期務めた。1965年、副議長に就任。県クレー射撃協会会長などを歴任。1974年に死去、享年78であった（『青森県議会史 自昭和38年～至昭和41年』〔青森県議会、1983年〕、1462頁）。

② 県議選での得票

・1955年4月の県議選	7,291票（第五位）	自由党
・1959年4月の県議選	9,019票（第三位）	自民党
・1963年4月の県議選	9,245票（第三位）	々

(平均得票数) 8,518票

③ 横顔

米沢鉄五郎は1896年に生まれ、油川町出身である。1921年、警察官となり、警察署長を退任した後、青森市助役、市議、および県議を歴任した異色の経歴の持ち主だ。青森市体育協会会長、県猟友会会長などを歴任。自民党県連総務などを務めた。県スポーツ功労章、県褒賞を受けた（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、732頁、『陸奥新報』1965年6月12日）。

4. おわりに

冒頭で述べたように、1964年6月18日に開催された第78回定例会は議長辞任や佐々木秀文議員の発言をめぐり、紛糾。会期の冒頭、三浦議長は「一身上の都合」で辞表を提出。しかし、辞表の理由が漠然過ぎるとして、社会党と共産党の両党がこれを問題にした。

各派交渉会では、三浦議長から事情聴取したものの、自民党側は押切り、後任の議長選挙が行われ、自民党の三村泰右が議長に就任。議長交代劇の背景には、1年後に三村泰右・議員に議長職を譲り渡すという申し合わせが昨年からの出来ていたことだ。与党自民党の筋書き通りの展開となった。野党は、自民党内の事情だけで議長を交代させる“裏取引”に、強く反発した（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、124頁）。

なお、副議長は自民党議員の申し合わせで、一区、二区が任期半分ずつを分けることになっており、藤田重雄副議長が党議に基づいて辞表提出。後任については、米沢鉄五郎（青森市選挙区）と沢田操（三戸郡選挙区）が候補に上がったが、しかし、沢田議員が年長の米沢議員に譲り、米沢議員に落ち着いた（『東奥日報』1965年6月12日）。

第9章 議長：毛内豊吉（1965年10月2日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 毛内豊吉
3. おわりに

1. はじめに

県議会の第85回定例会は1965年10月2日，新議長に自民党で西津軽郡選出の当選4回の毛内豊吉（53歳）を選出した。6月の定例会から持越しとなっていた議長交代は，9月定例会の最終日に自民党の調整が成功。毛内豊吉が議長に就任し，三村泰右と交代した。毛内は1967年4月の改選時まで1年6ヵ月間，議長職を務めることになった（『陸奥新報』1965年10月3日）。

議長の交代問題は，自民党議員団の申し合わせにより，第一区（南部），第二区（津軽）が任期を半分ずつ分け合うことになっていた。申し合わせによれば，三村議長の任期は先の6月定例会で切れたものの，下北開発問題を軌道に乗せるまでという理由で，辞任を今回の定例会に持ち越していた。一方的な自民党の都合に社会党から，辞任の理由が「一身上の都合」では納得できない，留意すべきだという声が出た。だが，三村議長は辞意を撤回しなかった。最終的に，本会議には自民党議員30人だけが出席し，自民党単独審議で新議長に毛内豊吉を選んだ（『青森県議会史 自昭和38年～至昭和41年』〔青森県議会，1983年〕，976頁）。

2. 毛内豊吉

① 経歴

毛内豊吉は1912年2月27日，西津軽郡の車力村に生まれた。五所川原小学校，大館中学を経て，明治大学政経学部を卒業。1947年，車力村村長。1947年，県議補選で県議に当選，1951年から通算3期務めた（1955年落選，

1959年に返り咲く)。1965年、議長に就任。車力村農業会専務理事、自民党県連総務会長などを歴任。1983年に死去、享年71であった（『青森県議会史 自昭和38年～至昭和41年』〔青森県議会，1983年〕，1461頁）。

② 県議選での得票

・1949年2月の県議補選	13,474票	自由党
・1951年4月の県議選	4,661票（第四位）	々
・1959年4月の県議選	6,126票（第三位）	自民党
・1963年4月の県議選	7,351票（第四位）	々
（平均得票数）	7,903票	

③ 横顔

毛内豊吉は、車力村の豪商の家の出である。明治大学時代、親の仕送りを断り苦学して卒業。1932年、29歳で酒造業を引き継いだ。1947年、戦後初の「民選」村長となり、1949年、県議選補選に出馬して当選。1965年、当選回数が4回と少なかったものの、議長に就任。車力村体協の初代会長も務め、「津軽大橋」は竹内俊吉知事との合作だ、といわれている（『青森県人名事典』〔東奥日報，2002年〕，685頁）。

3. おわりに

自民党の議長人事問題は、常に内紛を含み多数党としての、いわば“ガン”であることを証明した。ただ、自民党内にも、今回の議長交代劇を通じて浮かんできた任期中の細切れ交代を再検討する声が上がっており、今後、議長選任方法について慎重に検討する動きが生じたのは喜ばしい（『陸奥新報』1965年10月3日）。

第10章 議長：白鳥大八，副議長：秋山皐二郎（1967年5月6日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 白鳥大八
3. 秋山皐二郎
4. おわりに

1. はじめに

戦後六回目の県議選は、1967年4月15日に施行。1965年の国勢調査の結果、定数は一つ減り、51となった。立候補者は15選挙区で98人、戦後の県議選では最低であった。その結果は、長老が相次いで落選するなど、自民党は48人の候補者を擁立したものの、28人しか当選せず、過半数の26をようやく2議席上回る退潮ぶりであった。これに対して、社会党は10人、共産党は2人を当選させて気を吐いた（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社，2016年〕，139頁）。

県議選に伴う臨時県議会―「組織会」が5月6日に招集。会期は3日間で、議長に自民党で青森市選出の当選5回を数える白鳥大八（54歳）を、副議長に同じく自民党で八戸市選出の当選3回の秋山皐二郎（54歳）を選んだ。今回、正副議長の選出に際し、自民党による従来の二年交代、第一区と第二区持ち回りという悪しき慣行が打破された（「県議会」『東奥年鑑 昭和43年版』〔東奥日報社，1967年〕，137頁）。

2. 白鳥大八

① 経歴

白鳥大八は1912年8月20日、荒川村（現・青森市）に生まれた。早稲田大学法学部卒後、損保会社（安田火災海上保険会社）に勤務、1944年戦災で帰郷。戦後1947年、荒川村長に当選。1951年、県議に転身して当選、1967年まで連続5期務めた。この間、1957年に副議長、1967年には議長に

就任。また、1958年には衆議院総選挙、1971年には青森市長選に出馬したものの、いずれも落選。東青信用組理事長などを歴任。1989年に死去、享年77であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、340頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選（東津軽郡）	4,550票（第一位）	自由党
・1955年4月の県議選（青森市）	8,047票（第三位）	民主党
・1959年4月の県議選	々	8,451票（第六位）
・1963年4月の県議選	々	8,300票（第五位）
・1967年4月の県議選	々	9,450票（第二位）
（平均得票数）	7,760票	々

③ 横顔

白鳥大八は青森市荒川の旧家出身である。早稲田大学法学部卒業。安田火災海上に勤務。その後帰郷、早くから政界入りし、34歳で旧荒川村長に当選。38歳の時、県議に当選。スポーツマンとして知られ、県議団野球チームで投手を務めた。地味な人柄だが、誠実で頭も切れるという。県町村会長、下湯温泉社長、県信用組合協会会長などを歴任。1957年12月、44歳で副議長に、10年後の1967年5月、54歳で議長に就任した（『陸奥新報』1967年5月7日、『東奥日報』1967年5月7日）。

3. 秋山皐二郎

① 経歴

秋山皐二郎は1913年2月22日、八戸市に生まれた。県立八戸中学を経て、中央大学法学部卒。1939年、陸軍中尉。1952年、八戸市議に当選4期務めた。1959年、県議に転身して当選、3期務めた。この間、1967年、副議長に就任。1969年、八戸市長に当選、連続5期務めた。八戸魚市場社長、県

漁業信用基金協会理事長などに歴任。自民党県連政調会長などに就任。2007年9月28日に死去、享年84であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、755頁）。

② 県議選での得票

・1959年4月の県議選	13,439票（第一位）	無所属
・1963年4月の県議選	13,722票（第一位）	自民党
・1967年4月の県議選	13,725票（第一位）	々
（平均得票数）	13,629票	

③ 横顔

秋山皐二郎は八戸市出身である。県立八戸中学を経て、中央大学法学部卒業。八戸市議、県議に当選、また八戸市長を務め八戸市名誉市民である。県議時代、八戸市選挙区で平均して1万3千票を獲得して連続トップ当選を果たし、県内でも最高得票数だった。県議3回当選で副議長に就任。その後、1969年から八戸市長を連続5期務めた。漁業の街八戸にあって八戸魚市場社長、八戸漁連会長などを歴任。県議きっての水産通だ。八戸中時代、野球部のマネージャーとして甲子園の土を踏んだ。趣味は野球で、県議の野球チームでは内野手を務め、堅い守備に定評がある。勲三等旭日章など受章（『陸奥新報』1967年5月7日、『東奥日報』1967年5月7日）。

4. おわりに

県議会の正副議長を決める自民党の議員総会が1967年5月4日に開催され、正副議長に白鳥大八と秋山皐二郎を決めた。議員総会で議論となったのは、正副議長の任期をこれまでのように二年にするのか、それとも四年とするかであった。古参議員は二年、一方、新人議員は四年を主張した。新人議員の大部分は、従来の「一区、二区にこだわるのはおかしい」、「議

長の権威を高めるために四年間とすべきだ」と主張、新人議員の原則論に押し切られた形で、“議長四年任期”で一致した。

自民党がこれまでの慣行を打破、地方自治法の趣旨に従い議長の任期を四年とし、また第二区（津軽）、第一区（南部）といった地域にこだわらない方針を決めたのは、県議会の民主化の観点から大きな前進であった（『青森県議会史 自昭和42年～至昭和45年』〔青森県議会、1985年〕、102頁）。

第11章 議長：古瀬兵次（1969年12月8日、就任）、副議長：茨島豊蔵（1969年10月7日、就任）

<目次>

1. はじめに
2. 古瀬兵次
3. 茨島豊蔵
4. おわりに

1. はじめに

第100回の定例県議会は、1969年12月2日に招集、会期を8日までの7日間と決めた。提出議案は、23億2,080万円にのぼる一般会計補正予算案をはじめ23件と報告5件であった。議会での論戦は、明年度からの農政の方向、および陸奥湾小川原湖地区の大規模工業開発に焦点があてられた。

前定例会から懸案となっていた議長問題は、白鳥大八議長が次期青森市長選に立候補することを理由に最終日に辞任。後任には、下北郡選出の当選5回を数える長老で、自民党の古瀬兵次（66歳）を選んだ。一方、副議長には、前の第99回定例県議会で、当選2回で三戸郡選挙区の自民党の茨島豊蔵（59歳）を選んだ。これは、議会最終日の10月7日、八戸市長選に出馬が決定していた秋山臯二郎・副議長が辞任したからである（「議長に古瀬氏を選ぶ」『デーリー東北』1969年12月9日）。

2. 古瀬兵次

① 経歴

古瀬兵次は、1903年1月18日、兵庫県神崎町に生まれた。福崎町補修学校卒。1932年、神崎町議員に当選。1934年、北海道で鉱山業長。その後、大間鉄道建設のため青森県に転居。戦後、大畑振興製材所設立。1951年、県会議員に当選、通算9期務めた。この間、1969年、議長に就任。県遠洋漁業株式会社社長などを歴任。1963年、日ソ漁業交渉日本政府代表として訪ソしている。自民党県連幹事長、副会長に就任。全国議長会より自治功労者として、三回表彰。1976年、勲三等瑞宝章を受章。1992年に死去、享年89であった（『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1451～1452頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、252頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選	5,776票（第三位）	無所属
・1955年4月の県議選	6,227票（第四位）	々
・1959年4月の県議選	7,607票（第三位）	自民党
・1963年4月の県議選	8,255票（第二位）	々
・1967年4月の県議選	8,077票（第二位）	々
・1971年4月の県議選	8,384票（第二位）	々
・1975年4月の県議選	7,634票（第二位）	々
・1979年4月の県議選	8,420票（第一位）	々
・1983年4月の県議選	8,858票（第二位）	々
（平均得票数）	7,693票	

③ 横顔

上で述べたように、古瀬兵次は青森県生まれではない。兵庫県生まれで、1942年、大間鉄道建設応援のため下北郡を訪問、“県人”となりきって28

年目で県議会議長の要職を手にした。古瀬は、波乱に富んだ人生を歩んできた。人夫、農業、建設請負、鉱山監督、鉱山経営、および漁業である。木材会社の他、サケ、マス、マグロの計三隻の船主で、日本鮭鱒連合会長を務めるなど、全国漁業界に顔が売れていた。1987年4月の県議選にも出馬し、10期目を狙ったが84歳の高齢もあって落選。10期目の挑戦は全国的にも珍しく、1,653票差の第三位で落選、政界を引退。1992年、大畑町名誉町民第一号、同町役場正面玄関前にブロンズ像が立っている（「この人」『東奥日報』1969年12月10日）。

3. 茨島豊蔵

① 経歴

茨島豊蔵は1910年6月22日、三戸郡の階上村に生まれた。県立八戸中学を経て明治大学法学部卒。1937年、商工省燃料局に勤務。その後、東京重機工業株式会社社長。1947年、階上村長に当選、2期務めた。1955年、県議に転身して初当選。二回続けて落選したもの、1967年4月、県議に再選。1969年10月、副議長に就任。1988年12月19日に死去、享年78であった（『青森県議会史 自昭和40年～至昭和45年』〔青森県議会、1985年〕、1459頁）。

② 県議選での得票

・1955年4月の県議選	4,733票（第四位）	民主党
・1967年4月の県議選	7,013票（第四位）	自民党
（平均得票数）	5,873票	

③ 横顔

茨島豊蔵は階上村出身である。県立八戸中学を経て、明治大学卒。役人になったが会社に横すべり。終戦時は、陸軍大尉として、青森地区司令部の後方主任だった。戦後は「階上の海岸で魚を釣っているところを村長に

かつぎ出されて」階上村長を2期務めたという。1955年県議に転身して当選。しかし、連続二回も次点で落選。1967年に9票差で返り咲いた。茨島にはられるレットルは、“自民党の良識派”である（「この人」『東奥日報』1969年10月8日）。

4. おわりに

県議会自民党議員団は、1969年12月8日、「議員総会」を開催。辞意を明らかにしていた白鳥大八・議長の後任に、古瀬兵次を推すことを満場一致で決め、難航していた議長人事に終始符を打った。白鳥議長は、不文律であった議長二年交代を白紙に戻し、四年任期一杯を条件に受けた経緯もあり、議事運営に支障がなかったと、辞意を拒み続けていたものの押し切られ、新ルールは元のもくあみに逆戻りした（「議長に古瀬氏を選ぶくずれた新ルール」『デーリー東北』1969年12月9日、「社説：後味の悪い県議会議長交代」『陸奥新報』1969年12月10日）。

一方、副議長に関しては、秋山阜二郎副議長が11月9日に行われる八戸市長選へ出馬するための措置であり、新たに茨島豊蔵が選ばれた。

第12章 議長：寺下岩蔵，副議長：秋田正（1971年5月8日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 寺下岩蔵
3. 秋田正
4. おわりに

1. はじめに

戦後七回目の県議選は、1971年4月11日に行われた。定数51に92人が立候補、保守と革新、新旧両陣営が激突、接戦が繰り広げられた。開票の結果、自民党27人、社会党9人、公党1人、共産党2人、農政連3人、およ

び無所属9人が当選。自民党は改選前と同じく、議席の過半数を占めて第一党の座を堅持。今回の県議選では、公明党と県農協政治連盟（以下、「農政連」と略）が初めて公認候補を擁立し、既成政党に挑戦したのが注目された（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、177、179頁）。

県議改選後初の臨時会―「組織会」は、5月8日に開会。自民党で八戸市選出の当選5期目の寺下岩蔵（65歳）を議長に、また同じく自民党で五所川原市選出の当選3期目の秋田正（59歳）を副議長に選んだ。また、自民党は、常任委員会の全委員長・副委員長の席をすべて独占した。なお、議長の選出をめぐり、八戸市選出の寺下岩蔵と三戸郡選出の小坂甚義両氏の“順番”調整が難航したものの、寺下の県連幹事長として党務に貢献した実績がものをいった（「正副議長候補 寺下、秋田氏を選ぶ」『デーリー東北』1971年5月8日、「県議会」『東奥年鑑 1971年版』〔東奥日報社、1971年〕、72頁）。

2. 寺下岩蔵

① 経歴

寺下岩蔵は1906年3月15日、南部の八戸町に生まれた。八戸尋常小学校卒業後、1931年、土木建築請負業寺下組を創設。1959年から1963年まで、寺下建設株式会社社長。1947年、八戸市議会議員に当選。1951年、県議に転じて連続2期当選。1959年に落選。1963年、返り咲き、連続3期合わせて、通算5期20年間県議を務めた。この間、1971年、議長に就任。自民党県連幹事長、会長などを歴任。1973年、参議院選に出馬して当選、これを2期務めた。1980年4月19日に死去、享年74であった（『青森県議会史 自昭和42年～至昭和45年』〔青森県議会、1985年〕、1454頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、448頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選	6,092票（第四位）	民主党
・1955年4月の県議選	6,829票（第三位）	々
・1963年4月の県議選	10,461票（第五位）	自民党
・1967年4月の県議選	8,227票（第五位）	々
・1971年4月の県議選	9,963票（第三位）	々
（平均得票数）	8,314票	

③ 横顔

寺下岩蔵は八戸町出身である。尋常小学校卒業後、左官屋の手伝い、土木労働者、トビ職などを転々し、土木建築請負業寺下組を設立。戦後、1947年、八戸市議会議員に当選。1951年、県会議員に転じて当選。通算5期、24年務めた。この間、自民党県連幹事長や議長に就任。1973年には、参議院補選で当選、1977年に再選。1975年、北海道開発庁次官を務めた。調整役として手腕を発揮し、また八戸工業大学の設立に尽力。県アマチュア・ボクシング連盟会長、南部芸能協会会長などに就任。党務に専念し、終始裏方役に徹した（「この人」『東奥日報』1971年5月10日）。

3. 秋田正

① 経歴

秋田正は、1912年2月27日、川山村（現・五所川原市）に生まれた。五所川原農学校卒。中川村議、1949年、五所川原市助役。1963年、県議に転身して当選、これを連続5期務めた。この間、1971年には、副議長に、そして1979年には議長に就任。自民党県連政調会長などを務めた。1973年および1978年、全国議長会より自治功労者として表彰。1984年2月6日に死去、享年72であった（『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1990年〕、1447～1448頁）。

② 県議選での得票

・1963年4月の県議選	8,002票（第一位）	自民党
・1967年4月の県議選	6,801票（第二位）	々
・1971年4月の県議選	7,544票（第二位）	々
・1975年4月の県議選	8,618票（第一位）	々
・1979年4月の県議選	8,976票（第一位）	々
（平均得票数）	7,988票	

③ 横顔

秋田正は北津軽郡の川山村出身である。五所川原農学校卒業後、中川村農協組合長、中川村議を務め、五所川原市助役に就任。その後県議に当選、これを5期務め、副議長、議長に就任。農業経営の安定、農村地域工業導入促進に力を注いだ。県議会では農政通を自認。県議選初当選以来、連続5期当選の実績が示すように、五所川原市民の信任も厚い。3期目の時副議長に推薦され、満場一致で祭り上げられたが、それは秋田の人柄のよさによるものだった、という（「この人」『東奥日報』1971年5月10日）。

4. おわりに

改選後初の臨時県議会は5月8日に招集。「組織会」では、議長に寺下岩蔵を、また副議長には、秋田正を選出した。しかし、自民党の正副議長選びに反発した野党との話し合いが長びき、本会議の開催が大幅に遅れるなど、スタート早々波乱含みとなり、県民の期待を裏切った。

新しい議長に選ばれた寺下は、「議長のいすを汚すことになったが、みなさんの協力がなければ正常な議会運営がむずかしい」と協力を要請。また、新しく副議長に選ばれた秋田は「議長の補佐役として重責を果たしたい」と挨拶した（「寺下氏、秋田氏 正副議長を選出一臨時県議会開く」『陸奥新報』1971年5月9日）。

第13章 議長：小坂甚義，副議長：岡山久吉（1972年6月30日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 小坂甚義
3. 岡山久吉
4. おわりに

1. はじめに

県議会の第110回定例会は、1972年6月26日に招集された。だが、開会初日から正副議長問題で紛糾。寺下岩蔵・議長，秋田正・副議長は、自民党議員団の申し合わせで、緊急質問の後に辞表を提出したものの、これは一種の“密約”によるものであって、自民党議員団は議会の開会に先立ち「議員総会」を開催、議長候補に三戸郡選出で当選6回の小坂甚義（52歳）を、また副議長候補に上北郡選出で当選4回の岡山久吉（62歳）を推薦することにした。

野党は、正副議長の任期は4年が原則であり、党内事情で後任人事の選挙を議事日程に追加するのは納得できかねるとして反対、議会は空転した。議長人事は4日後の30日の本会議で行われることになり、同日、寺下議長、秋田副議長の辞職を承認、小坂甚義と岡山久吉が正副議長に選出された（「小坂議長，岡山副議長」『デーリー東北』1972年7月1日，藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社，2016年〕，182頁）。

2. 小坂甚義

① 経歴

小坂甚義は1920年8月29日、三戸郡新郷村に生まれた。県立八戸中学を経て、法政大学、および秋田鉾山専門学校を卒業。1948年、新郷村農業共済組合長、1949年、県信用農協連理事。1951年、県議に当選、連続7期務めた。この間、1958年、副議長に、1972年、議長に就任。祖父、父と三代

にわたる県議の「政治家一家」だ。1967年、自民党県連幹事長、同副会長を歴任。全国議長会より自治功労者として表彰。1974年、藍綬褒章を受章。1988年9月6日に死去、享年68であった（『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1452頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選	5,200票（第四位）	自由党
・1955年4月の県議選	4,827票（第三位）	々
・1959年4月の県議選	7,704票（第三位）	自民党
・1963年4月の県議選	6,621票（第三位）	々
・1967年4月の県議選	7,457票（第三位）	々
・1971年4月の県議選	8,134票（第三位）	々
・1975年4月の県議選	8,315票（第四位）	々
（平均得票数）	6,894票	

③ 横顔

小坂甚義は、“キリストの墓”で有名な新郷村出身。県立八戸中学を経て、法政大から秋田高専へと進んだエンジニアだ。戦争中は機甲将校として、戦車隊長を務めた。20代で県販連専務となり、県の農協団体を牛耳った。小坂地区の素封家で、祖父、父ともに県議の「政治家一家」である。1951年、県議に初当選、連続6期務めた。1958年、38歳で副議長、1972年、52歳で議長に就任。六大学のテニスで優勝したスポーツマンであり、議員団野球の全国大会でも優勝。野党を押さえる円熟した議事さばきに定評があり、県議会の最長老である（「この人」『東奥日報』1972年7月1日）。

3. 岡山久吉

① 経歴

岡山久吉は1910年3月5日、上北郡甲地村（現・東北町）に生まれた。野辺地尋常高等小学校卒。1941年、甲地村議に当選、連続4期当選、この間、副議長を務めた。1952年、甲地村森林組合長に就任。1959年には、県議に転じて当選、これも連続4期務めた。1972年、副議長に就任。自民党県連政調会長、同総務会長を歴任。全国議長会より自治功労者として表彰。1970年、藍綬褒章を受章。1994年に死去、享年84であった（『青森県議会史自昭和48年～至昭和49年』〔青森県議会、1987年〕、1582頁）。

② 県議選での得票

・1959年4月の県議選	8,829票（第一位）	自民党
・1963年4月の県議選	8,487票（第三位）	々
・1967年4月の県議選	8,420票（第二位）	々
・1971年4月の県議選	9,860票（第一位）	々
（平均得票数）	8,899票	

③ 横顔

岡山久吉は、甲地村出身である。甲地村議を経て、県議に当選、1972年副議長に就任。甲地村森林組合長として、優良材の主産地を目指した。誠実な人柄と党務へのひたむきな努力を買われライバルを押さえ副議長に推された。「貧乏百姓の生まれだが、それだけに政治の場でものを申したい」というのが、政界入りのキッカケだという。農政、林政問題では一言で、モットーは「思いついたらすぐに実行に移すことだ」（「この人」『東奥日報』1972年7月1日）。

4. おわりに

県議会の議長ポストは、1971年5月の統一地方選挙の後、自民党内で寺下岩蔵と小坂甚義両議員が激しく争い、寺下議長、秋田副議長が誕生した経緯があった。その際、収拾条件として、1972年6月の定例会で寺下が辞任、後任は小坂とし、任期は1973年12月の定例会までとする、という一種の“密約”が交わされた。

自民党は6月21日、「議員総会」を開催。寺下、秋田正副議長の辞意表明を菊池議員総会長が取り次ぐ形で表明するにとどめ、定例会冒頭、後任人選に取り組んだ。26日に開会した定例会では、緊急質問のあとに正副議長が辞表を提出した。

その後、自民党の議員総会では、寺下、秋田正副議長の後任に、6期当選の小坂甚義（三戸郡選出）を議長候補に、また副議長候補に4期当選の岡山久吉（上北郡選出）を決定。野党は、①正副議長の任期は4年が原則で、自民党内の事情で突然議事日程に追加するのは納得できない、②開会冒頭辞任するのは理由が明らかでない、③自民党による議長タライ回しである一などの理由を挙げて強硬に反対、選出は6月30日まで持ち越された。

ただ、野党側は必ずしも足並みがそろわず、議長問題をめぐる与野党対立による審議の空転は避けられ、30日、小坂議長と岡山副議長を選出。「論理として野党に分があったものの、多数党である自民党の“お家の事情”に押し切られた形」となり、議長交代劇に終止符がうたれた（「県議会」『東奥年鑑 昭和49年版』〔東奥日報社、1973年〕、70頁、『青森県議会史 自46年～至昭和49年』〔青森県議会、1987年〕、669～670頁）。

第14章 議長：小野清七、副議長：工藤重行（1973年12月19日、就任）

<目次>

1. はじめに
2. 小野清七

3. 工藤重行
4. おわりに

1. はじめに

県議会の第116回定例会は、1973年12月3日から19日までの17日間開催。最終日の19日、本会議で小坂甚義議長と岡山久吉副議長が辞任し、後任の選任が行われた。これは自民党内の“密約”に基づくもので、野党は「在職1年半、これといった失点のない小坂議長の交代には問題がある」と反発、辞任の弁明を求める動議が提出されるなど終日紛糾した。

ただ、動議は否決され、野党退席のまま後任の正副議長の選任を実施。新しい議長に自民党で東津軽郡選出の当選5回の小野清七（62歳）を、また副議長には、同じく自民党で黒石市選出の当選3回の工藤重行（61歳）を選んだ（『県議会』『東奥年鑑 昭和50年版』〔東奥日報社、1974年〕、73頁）。

2. 小野清七

① 経歴

小野清七は1911年1月18日、東津軽郡の逢田村に生まれた。逢田村広瀬高等小学校卒。1947年、逢田村農業会長、1948年、同村農業協同組合長を歴任。1951年から、県信連理事、県畜産会理事などを務めた。1955年、県議に当選、以後、何と連続9期連続当選、しかも、すべて第一位での当選だ。この間、1973年12月から1975年5月まで議長に就任。自民党県連総務会長、幹事長などを務めた。全国知事会より、自治功労者として表彰。1973年、藍綬褒章を受章。1990年に死去、享年79であった（『青森県議会史 自昭和46年～至昭和49年』〔青森県議会、1987年〕、1579～1580頁）。

② 県議選での得票

- ・ 1955年4月の県議選 6,835票（第一位） 無所属

・1959年4月の県議選	5,908票 (第一位)	自民党
・1963年4月の県議選	8,106票 (第一位)	々
・1967年4月の県議選	7,359票 (第一位)	々
・1971年4月の県議選	8,433票 (第一位)	々
・1975年4月の県議選	8,601票 (第一位)	々
・1979年4月の県議選	10,114票 (第一位)	々
・1983年4月の県議選	8,243票 (第一位)	々
・1987年4月の県議選	10,902票 (第一位)	々
(平均得票数)	8,278票	

③ 横顔

小野清七は、東津軽郡の逢田村出身である。尋常小学校卒。村役場書記をふり出しに、農獣医の資格も取った。逢田村農協会長、県農業会議副会長を歴任、農業の生産向上に尽力。1955年、県議に初当選、以後連続当選9回を誇る。しかもすべてトップ当選であった。その間、1973年議長に就任。“ミスター新幹線”と異名をとるほど東北新幹線の盛岡以北の完成に情熱を傾けた。1987年、脳梗塞で倒れ、1990年、県議現職中に青森市の病院で死去（『陸奥新報』1973年12月20日、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、127～128頁）。

3. 工藤重行

① 経歴

工藤重行は1912年7月4日、尾上村（現・黒石市）に生まれた。黒石尋常小学校高等科卒。1927年、建設業に従事、1934年、建設業工藤組を創設。1947年、尾上町議に当選、3期務めた。1956年、黒石市議に当選、2期務めた。その後1963年、県議に転身して当選、3期務めた。この間、1973年に副議長に就任。黒石市建設協会会長、南黒建設協会会長、黒石市ガス会社社

長などを歴任。自民党県連副委員長など務めた。全国議長会より自治功労者として表彰。1974年、藍綬褒章を受章。1987年に死去、享年75であった(『青森県議会史 自昭和46年～至昭和49年』〔青森県議会、1987年〕、1578～1579頁)。

② 県議選での得票

・1963年4月の県議選	6,313票 (第二位)	自民党
・1967年4月の県議選	9,358票 (第一位)	々
・1971年4月の県議選	9,538票 (第一位)	々
(平均得票数)	8,403票	

③ 横顔

工藤重行は、南津軽郡の尾上村出身である。尾上尋常小高等科修了。建設業に従事し、建設業工藤組を創設。建設会社社長を経て、尾上町議3期、黒石市議2期、県議3期務め、1973年、副議長に就任。建設会社の社長として、誠実な人柄で地域社会の信望も厚かった。政治家として、地域や県政の発展に尽力した(『青森県人名事典』〔東奥日報社。2002年〕、218頁)。

4. おわりに

県議会第116回定例会最終日の1973年12月19日、自民党県議団は、舞台裏工作の筋書き通り、「民主クラブ」との合同議員総会を開催。小坂甚義議長の斡旋で、自民党と民主クラブが一本化、小坂議長の花道を開く形式をとった。

既述のように、小坂議長の交代については在職1年半で、これといった失点がなかった。野党から批判の声が噴出する中で「密約の議長交代劇」が演じられ、遺憾なことに、本会議では野党が欠席のまま、自民党のみで後任の正副議長が決まった(『東奥日報』1973年12月20日)。

第15章 議長：中村富士夫，副議長：松尾官平（1975年5月10日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 中村富士夫
3. 松尾官平
4. おわりに

1. はじめに

1975年4月13日に県議選が行われ，自民党は定数52中40人の当選を果たし，大幅に議席を伸ばした。これに対して，社会党は7人，公明党は2人，共産党は1人，および無所属は2人が当選するとどまり，革新側が大きく後退した。5月8日に招集された県議会の第68回臨時会―「組織会」では，自民党は県議選の圧勝を受けて強気の議会運営に転じ，正副議長はもちろんのこと，常任委員会の委員長の全ポストを独占した。

議長には，自民党で弘前市選出の県議6期目の中村富士夫（66歳）を，また副議長には，同じく自民党で三戸郡選出の県議4期目の松尾官平（48歳）を選んだ。

2. 中村富士夫

① 経歴

中村富士夫は1908年1月1日，弘前市に生まれた。東京高等工科学学校土木学科卒。1932年，弘前市の土木課長を経て，1934年，県庁の土木課へ。1936年には，都庁入り。1946年，弘前市役所に「返り咲き」，都市計画課長，水道課長を経て，1955年，退職。同年，県議選に出馬して当選，連続6期務めた。この間，1975年，議長に就任。中弘地方からの議長は1947年の櫻田清芽以来のことだ。1978年，自民党県連副会長。全国議長会より，自治功労者として表彰。1972年，藍綬褒章を受章。1984年2月27日に死去，享年76であった（『青森県議会史，自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会，

1989年], 1445頁, 「スポット」『陸奥新報』1975年5月12日)。

② 県議選での得票

・1955年4月の県議選	4,919票 (第二位)	自由党
・1959年4月の県議選	8,229票 (第二位)	自民党
・1963年4月の県議選	7,056票 (第四位)	々
・1967年4月の県議選	8,775票 (第三位)	々
・1971年4月の県議選	11,696票 (第三位)	々
・1975年4月の県議選	11,769票 (第三位)	々
(平均得票数)	8,741票	

③ 横顔

中村富士夫は、弘前市出身である。東京高等工学校土木工学科卒。弘前市役所、県庁を経て、都庁入り。戦後、弘前市役所に戻り、都市計画課長、水道課長を歴任。1955年、県議に出馬して当選。これを連続6期務めた。“中富士さん”と親しまれ、話術巧みで県政界の重鎮だった。弘前市役所時代、アクの強い性格だけに市議を向こうに回してケンカもした。「それならいっそ県議員になって……」が政界入りの動機だったという。座右の銘は“誠実”，趣味は釣り，将棋（「この人」『東奥日報』1975年5月11日，「スポット」『陸奥新報』1975年5月11日）。

3. 松尾官平

① 経歴

松尾官平は、1927年1月25日、南部の三戸町に生まれた。盛岡農林専門学校農科卒，中央大学経済学部中退。1948年，酒造会社「金五」に入社し，工場長に就任，三戸町商工会会長に就任。1963年，県議に当選5期務めた。この間，1973年，県商工連合会長。1975年，副議長に就任。1980年，参議

院選補選に出馬して当選，通算3期務めた。1995年，副議長に就任。1986年，自民党県連会長。1998年，勲一等瑞宝章を受章。1999年，三戸町名誉市民。2013年7月30日に死去，享年86であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，1043頁，藤本一美『戦後青森県の保守・革新・中道勢力—青森県選出の国会議員』〔志學社，2017年〕，184～188頁）。

② 県議選での得票

・1963年4月の県議選	8,326票（第一位）	自民党
・1967年4月の県議選	11,709票（第一位）	々
・1971年4月の県議選	11,487票（第一位）	々
・1975年4月の県議選	9,869票（第二位）	々
・1979年4月の県議選	14,735票（第一位）	々
（平均得票数）	11,225票	

③ 横顔

松尾官平は，1927年生れの三戸町出身である。盛岡高等農林卒，中央大を中退し，家業の酒造業に従事。1963年，県議に当選，祖父，父，息子も県議を務めた「政治家一家」だ。県議には，1975年を除いて常に最高得点で当選，平均得票は1万1千票を超える。この間，副議長も務めた。「地域に奉仕する。父が受けた恩を返す」—これが県議に向かわせた動機だという。県議を経て参議院議員となり，副議長に就任。若さと行動力が売り物だ。趣味は写真，浮世絵鑑賞。著作も多数ある（「この人」『東奥日報』1975年5月11日，「スポット」『陸奥新報』1975年5月12日，『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，1043頁）。

4. おわりに

1975年2月2日の県知事選では，竹内俊吉・現知事が三期12年の実績を

背景に圧倒的勝利を取めて野党候補を退けた。また、4月13日に行われた県議選でも、自民党は定数52中42議席を獲得して圧勝するなど、「保守王国」の強さと安定を見せつけた。既述のように、自民党が正副議長や委員会委員長のポストを独占したのはいうまでもない。

第16章 議長：山田寅三、副議長：福沢芳穂（1976年6月22日、就任）

<目次>

1. はじめに
2. 山田寅三
3. 福沢芳穂
4. おわりに

1. はじめに

県議会の第126回定例会は、1976年6月11日に招集、22日までの12日間開催した。議案は10件、補正予算なしの変則議会で、焦点がぼやけた。そのため、論議は低調であって、むしろ正副議長の選出が中心となった。

定例会最終日の6月22日、本会議で中村富士夫・議長の辞任が了承、後任議長の選挙を実施、自民党で青森市選出の当選6回目の山田寅三（74歳）を選出した。またこの後、松尾官平・副議長からも辞意が提出され、選挙の結果、同じく自民党で弘前市選出の当選3回の福島芳穂（63歳）を選出した（『県議会』『東奥年鑑 昭和53年版』〔東奥日報社、1979年〕、166頁）。

2. 山田寅三

① 経歴

山田寅三は1902年3月28日、札幌市に生まれた。京橋築地工学校工作機械科卒。映画配給会社の勤務を経て、1933年、青森市の映画館「文芸館」の支配人に就任。1934年、県映画協会会長。1947年、青森市議に当選。1951年、県議に転身して当選、通算6期務めた（1967年落選、1971年返り

映く)。この間、1976年、議長に就任。自民党県連副会長、三内温泉株式会社社長を歴任。全国議長会より、自治功労者として表彰。勲4等旭日小綬章を受章。1982年11月5日に死去、享年80であった（『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1445頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、712頁）。

② 県議選での得票

・1951年4月の県議選	6,228票（第一位）	無所属
・1955年4月の県議選	8,133票（第二位）	々
・1959年4月の県議選	7,352票（第七位）	々
・1963年4月の県議選	7,760票（第七位）	自民党
・1971年4月の県議選	10,518票（第二位）	々
・1975年4月の県議選	9,051票（第九位）	々
（平均得票数）	8,174票	

③ 横顔

山田寅三は、札幌市出身である。東京の築地工学校卒後、映画の仕事に従事、青森市で映画館を経営。戦時中は軍用犬協会支部長、戦後は警察犬協会長と犬に関わりが多い。戦後、青森市議、県議に当選、県議を通算6期務めた。この間、議長に就任。歯切れのいい弁舌がこの人の売り物だ。「あすなろ国体」では、映画弁士で鍛えたさわやかで歯切れのよい挨拶で好評を博した、という（「この人」『東奥日報』1976年6月23日、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、712頁）。

3. 福沢芳穂

① 経歴

福沢芳穂は1913年1月4日、弘前市に生まれた。県立弘前中学卒。1955

年、弘前市会議員に当選、連続4期務めた。1967年、県議に転身して当選、連続4期務めた。この間、1976年、副議長に就任。自民党連副幹事長などを歴任。全国議長会より、自治功労者として表彰。1978年、藍綬褒章を受章。1993年5月14日に死去、享年80であった（『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1445頁）。

② 県議選での得票

・1967年4月の県議選	9,764票（第一位）	無所属
・1971年4月の県議選	10,832票（第六位）	自民党
・1975年4月の県議選	13,096票（第六位）	々
・1979年4月の県議選	10,769票（第六位）	々
（平均得票数）	11,115票	

③ 横顔

福沢芳穂は弘前市出身である。県立弘前中学卒業後、東目屋教育委員、弘前市議を経て、県議に当選、連続3期務めた。1976年、副議長に就任。県私立学校審議会会長などを歴任。趣味は読書である（『青森県人名大事典』〔東奥日報社、1969年〕、819頁）。

4. おわりに

正副議長の交代は、昨年（1975年）春の県議選直後の臨時県議会で、中村議長、松尾副議長が選任された時点において“約束”されていたのだ。任期4年間を前半1年半、後半を1年半とさらに分け合うことで、自民党内の暗黙の了解があった、という。

議長候補には、古参議員で議長未経験の山田寅三が次は出馬しない理由で“花道”が与えられて、すんなりと内定。しかし、副議長の方は候補者調整に手間取り、今限りで引退をほのめかしている福沢芳穂を推すこと

了承した（『東奥日報』1976年6月23日）。

自民党議員による正副議長のたらい回しは、1959年から繰り返されている“悪例”であって、交代のたびに議会が混乱。いわば、密約により正副議長を決定する自民党に対して、野党からは「議長の私物化」だとの批判の声強い（『陸奥新報』1976年6月23日）。

第17章 議長：藤田重雄，副議長：成田芳造（1977年12月16日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 藤田重雄
3. 成田芳造
4. おわりに

1. はじめに

県議会の第132回定例会は、1977年12月1日から16日までの日程で開会。定例会最終日の16日、山田寅三・議長と福沢芳穂・副議長が一身上の理由で辞表を提出。これに対して、野党は一党独裁による「ポストのたらい回し」であると議院運営委員会から引き揚げ、本会議をボイコットした。

自民党は単独で正副議長の選挙を行い、自民党で弘前市選出の当選6回目の藤田重雄（71歳）を議長に、また、同じく自民党で青森市選出の当選3回を数える成田芳造（53歳）を副議長に選んだ。このように、自民党が1975年4月から1977年4月までの任期中、中村富士夫、山田寅三、および藤田重雄の3名の議長を誕生させたことについて、野党や県民から大きな批判を浴びたことは、いうまでもない（「県議会」『東奥年鑑 昭和54年版』〔東奥日報社、1980年〕、186頁）。

2. 藤田重雄

① 経歴

藤田重雄は1906年5月15日、高杉村（現・弘前市）に生まれた。青森師範学校本科第二部卒。小学校教員を経て、1944年、高杉村長。1953年、高杉村教育長。1955年、県議に転身して当選、通算6期務めた（1967年落選、1971年に返り咲く）。この間、1963年に副議長に、また1977年には議長に就任。自民党県連政調会長、県リング振興株式会社取締役などを歴任。全国議長会より、自治功労者として表彰。1978年、藍綬褒章を受章。1995年に死去、享年89であった（『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1445頁）。

② 県議選での得票

・1955年4月の県議選	5,923票（第三位）	無所属
・1959年4月の県議選	7,224票（第五位）	自民党
・1963年4月の県議選	8,490票（第二位）	々
・1971年4月の県議選	17,815票（第一位）	無所属
・1975年4月の県議選	15,657票（第一位）	自民党
・1979年4月の県議選	14,396票（第二位）	々
（平均得票数）	11,584票	

③ 横顔

藤田重雄は1906年生まれで、中津軽郡の高杉村出身。青森師範学校を卒業。小学校教員を務めた後、1944年、高杉村長に当選。1955年、県議に当選、通算6期務めた。この間、副議長、議長に就任。平均得票数は、1万1千票をこえた。全国都道府県議長会副会長などを歴任。1983年、地方自治功労で勲三等瑞宝章を受章、1995年、正五位に叙せられた。趣味は、スポーツと囲碁（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、602～603頁）。

3. 成田芳造

① 経歴

成田芳造は1924年3月21日、青森市に生まれた。旧制青森商業卒，中央大学法学部卒。1949年，弁護士登録（東京弁護士会）。1957年，青森県弁護士会登録。1960年，青森県弁護士会副会長に就任。1967年，県議に当選，連続3期務めた。この間，1977年，副議長に就任。自民党県連副幹事長などを務めた。全国議長会より，自治功労者として表彰。勲五等瑞宝章を受章。2013年12月に死去，享年89であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，989頁，『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会，1989年〕，1444～1445頁）。

② 県議選での得票

・1967年4月の県議選	8,242票（第六位）	自民党
・1971年4月の県議選	10,269票（第四位）	々
・1975年4月の県議選	10,397票（第七位）	々
（平均得票数）	9,636票	

③ 横顔

成田芳造は，青森市出身の弁護士である。中央大学法学部を卒業して，1948年，高等試験司法科合格。1951年，弁護士登録。1960年，県弁護士会副会長。1967年，県議初当選，3期連続当選。この間，1977年，副議長に就任。趣味は読書，スポーツ観戦で，好物は魚類だ，という（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，989頁）。

4. おわりに

1977年12月16日，「自民党議員団は，県議会定例会の最終日，予定通り正副議長の交代を行った。……多数をたのんで，正副議長のポストをもて

あそんでいるかのようだ。4年の任期を細切れにして議員が各々交代で議長ポストに就任することは、議長の権威を落とすばかりでなく、議会全体がもの笑いのタネになることである」（「社説：たるみ切った県議会」『東奥日報』1977年12月17日）。

『東奥日報』の社説の指摘は、正にその通りである。戦後4年間の任期をまっとうしたのは1951年から1955年までの中島清助議長だけで、あとは1年交代がザラだ。年功序列に従って、次々と議長を“乱造”しているのが現実の姿であるが、再考を望みたい（「県議会を顧みて—議長問題 タライ回しに批判」『東奥日報』1977年12月17日）。

第18章 議長：秋田正，副議長：滝沢章次（1979年5月11日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 秋田正
3. 滝沢章次
4. おわりに

1. はじめに

1979年4月8日，県議選が行われた。自民党は定数49中34人を確保。一方，社会党は6人，公明党は1人，共産党は2人，新自由クラブは1人，無所属は8人とどまった。今回，県政史上初めて2人の女性議員が当選したのが特筆される。

今回の県議選では，郡部で現職議員が圧勝したものの，市部では，新旧交代が目立った。実際，青森市選挙区において，自民党の現副議長の成田芳造が，また弘前市選挙区で社会党県委員長の山内弘が落選するなど，県議の新旧交代を印象づけた（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社，2016年〕。225頁）。

県議改選後の初めての臨時会—「組織会」が5月11日に招集，自民党で

五所川原市選出の当選5回の秋田正（67歳）を、また副議長には、同じく自民党で八戸市選出の当選4回目の滝沢章次（45歳）を選んだ（『県議会』『東奥年鑑 1980年版』〔東奥日報社、1979年〕、176頁）。

2. 秋田 正

① 経歴

秋田正は1912年2月27日、川山村（現・五所川原市）に生まれた。五所川原農学校卒。中川村農協組合長、中川村議、（合併で）五所川原市議を経て、1955年、五所川原市助役に就任。1963年、県議に転出して当選、連続5期務めた。この間、1971年に副議長を、また1979年には、議長を務めた。県産米改良協会会長、県農業会議副会長、県私学審議会会長、自民党県連政調会長などを歴任。全国議長会から、自治功労者として表彰。1983年2月6日に死去、享年71であった（『青森県議会史、自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1447～1448頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、7頁）。

② 県議選での得票

・1963年4月の県議選	8,002票（第一位）	自民党
・1967年4月の県議選	6,801票（第二位）	々
・1971年4月の県議選	7,544票（第二位）	々
・1975年4月の県議選	8,618票（第二位）	々
・1979年4月の県議選	8,976票（第一位）	々
（平均得票数）	7,988票	

③ 横顔

秋田正は、北津軽郡の中川村出身である。五所川原農学校を卒業後、農業に従事。1933年から終戦まで10年あまり軍隊生活を体験。戦後、農業団

体の役員を務める一方、中川村議となって政治家になった。五所川原市議を経て、37歳の若さで同市の助役に就任。その後、県議に転じ、5期務めた。その間、副議長、議長に就任。農業問題はもちろん、県政全般にわたる政策通として知られた。秋田は農業経営の安定、農村地域工業導入促進に尽力。青年時代から政治に関わり、政治感覚はシャープだという。趣味は魚釣りである（「この人」『東奥日報』1979年5月12日、「こんにちは」『陸奥新報』1979年5月13日）。

3. 滝沢章次

① 経歴

滝沢章次は1933年8月27日、八戸市に生まれた。明治大学政経学部卒。1958年、光星学院高校講師。三浦一雄・衆議院議員の秘書を経て、1960年、八戸市議補選で当選、2期務めた。1967年、県議選に転身して当選、これを連続5期務めた。この間、1979年、副議長に就任。県私学審議会議長、県農業会議会長、県信用農業協同組合連合会会長、光星学院専務理事などを歴任。全国議長会より自治功労者として表彰。1996年9月12日に死去、享年63であった（『青森県議会史、自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1446～1447頁）。

② 県議選での得票

・1967年4月の県議選	7,809票（第七位）	無所属
・1971年4月の県議選	9,582票（第四位）	々
・1975年4月の県議選	9,223票（第五位）	自民党
・1979年4月の県議選	9,976票（第五位）	々
・1983年4月の県議選	9,132票（第八位）	々
（平均得票数）	9,144票	

③ 横顔

滝沢章次は八戸市出身である。明治大学政経学部卒業後、光星学院で教鞭をとった。その後、政治家をめざし、三浦一雄代議士の秘書となり、八戸市議を経て、県議に当選。これを4期務めた。議会内では主に教育関係を担当、県政に新しい施策を吹き込んだ。自民党内でも政策通として定評。明大時代は、アイスホッケー部の“名GK”として鳴らしたスポーツマン。趣味は旅行と歴史物の読書である（「この人」『東奥日報』1979年4月12日、「こんにちは」『陸奥新報』1979年4月13日）。

4. おわりに

今回、議長に選出された秋田正は、県議連続5期当選のベテラン議員。これまでの政治的手腕が高くそれが評価され、従来の「最多選で、議長未経験最優先」という自民党県連の鉄則を破って議長の座に就いた。

一方、副議長に就任した滝沢章次は「生粋の政党内」として有名で、津軽から議長が出た場合は、県南から選び均衡を維持した。しかし当初から、滝沢議員が副議長候補に上がっていたので、野党は正副議長の「たらい回し」だと強く反発した（「プロフィール」『陸奥新報』1979年5月12日）。

第19章 議長：菊池利一郎，副議長：佐藤寿（1980年7月14日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 菊池利一郎
3. 佐藤寿
4. おわりに

1. はじめに

県議会の第142回定例会は、1980年6月30日に招集され、7月14日まで開催。最終日の7月14日、本会議で正副議長の辞職に伴う、後任の正副議

長の選挙が行われた。新議長には、自民党所属で下北郡選出の当選5回の菊池利一郎（61歳）を、また副議長には同じく自民党で南津軽郡選出の当選4回の佐藤寿（60歳）を選んだ（『東奥日報』1980年7月15日）。

今回の定例会では、1979年の県議改選に伴う正副議長選の際、多数派会派の自民党が決めた「任期中、3人の議長で運営するものとし、その任期の最初が1年、あとは1年半ずつ」の申し合わせの1年目にあたり、果たして、議長交代が適切に行われるのかが注目された。事前の予想通り、秋田正議長、滝沢副議長が辞意を表明、後任の正副議長選挙を実施。野党がこれに反発したことはいうまでもなく、正副議長の選出は社会党が本会議をボイコットする中で行われた（「議長に菊池氏、副・佐藤氏—脚本通りの交代劇」『デーリー東北』1986年7月15日、「県議会」『東奥年鑑 1982年版』〔東奥日報社、1981年〕、177～178頁）。

2. 菊池利一郎

① 経歴

菊池利一郎は、1919年1月24日、下北郡の川内町に生まれた。東京成城中学校中退。菊池林業専務取締役、川内町商工会会長、下北製材協会専務取締役を歴任。1963年、県議に当選、連続6期務める。1979年の選挙を除き、すべてトップ当選だ。この間、1980年、議長に就任。自民党県連幹事長、同副会長。全国議長会より、自治功労者として表彰。1989年8月30日に死去、享年70であった（『青森県議会史、自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1446～1447頁）。

② 県議選での得票

・1963年4月の県議選	9,808票（第一位）	自民党
・1967年4月の県議選	8,531票（第一位）	々
・1971年4月の県議選	8,999票（第一位）	々

・1975年4月の県議選	8,029票（第一位）	々
・1979年4月の県議選	7,518票（第二位）	々
・1983年4月の県議選	9,762票（第一位）	々
（平均得票数）	8,775票	

③ 横顔

菊池利一郎は、下北郡の川内町出身である。成城中学中退。下北地方の林業で有名な菊池林業の代表社員となり、この他に採石会社、生コンクリート会社の役員を務めた。1963年、県議に当選、連続6回当選。この間議長に就任。数々の修羅場をくぐってきた県政界のベテランだ。スポーツは、野球、サッカー、ラグビー、および柔道と万能だという（「この人」『東奥日報』1980年7月15日、「きょうの顔」『陸奥新報』1980年7月15日）。

3. 佐藤 寿

① 経歴

佐藤寿は1920年5月14日、南津軽郡の常盤村に生まれた。県立弘前中学を経て、県立青年学校教員養成所卒。女鹿沢青年学校教諭を経て1962年、常盤村長。1970年1月の県議補欠選挙で当選、通算6期務めた（1983年落選、1987年に返り咲く）。この間、1980年、副議長に、また1993年には、議長に就任。自民党県連政調会副会長などを歴任。1996年、勲4等旭日章を受章。1991年9月7日に死去、享年71であった（『青森県議会史、自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1449～1450頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、896頁）。

② 県議選での得票

・1970年1月の県議補選	9,190票（第二位）	自民党
・1971年4月の県議選	9,280票（第三位）	々

・1975年4月の県議選	11,901票（第二位）	々
・1979年4月の県議選	9,876票（第三位）	々
・1987年4月の県議選	11,780票（第三位）	々
・1991年4月の県議選	8,926票（第四位）	々
（平均得票数）	10,159票	

③ 横顔

佐藤寿は、常盤村出身である。県立弘前中学を経て青年学校教員養成所卒。戦時中は青年学校教諭。戦後も青年団活動に専念。1947年の県議選を皮切りに政治の世界に入る。常盤村長1期，県議6期を務めた。常盤スイカ，常盤養鶏，トキワ養豚と，常盤という名前の生産物はすべて，村長時代の業績で，アイデア村長として知られた。副議長に就任するまで，神四平と激しい鏝迫り合い演じ，それだけに「和」をことのほか意識している，という。趣味は弘中時代から続けている詩吟である（「この人」『東奥日報』1980年7月15日，「きょうの顔」『陸奥新報』1980年7月16日）。

4. おわりに

県議会の第142定例会は，正副議長の交代が焦点であった。それは，昨年（1979年）の県議会の組織会以来の自民党側の「密約」であって，野党から強い反対の声が上がった。順調だった今回の定例会において，実質審議を棚上げし，約2時間半にわたって本会議を空転させた（「議会運営にシコリを残す」『デーリー東北』1980年7月15日）。

次期議長は，自民党内で昨年から菊池利一郎に決まっていたのですんなりと選考された。しかし，副議長は佐藤寿（南津軽郡選出，当選4回）と神四平（西津軽郡選出，当選4回）が候補に上り，その順番をめぐって論議を呼んだが，最終的に佐藤寿に落ちついた。「任期を三分割して3人議長の誕生」を二年交代にすべきだ，という反省の声が与野党から生じた

(「県議会を顧みる」『東奥日報』1980年7月15日)。

第20章 議長：脇川利勝，副議長：神四平（1981年12月19日就任）

<目次>

1. はじめに
2. 脇川利勝
3. 神四平
4. おわりに

1. はじめに

県議会の第148回定例会は、1981年12月1日から18日まで、18日の日程で招集された。しかし、正副議長の交代をめぐる混乱から会期を1日延長し、19日間にわたり開催された。

今回の定例会は、菊池利一郎・議長，佐藤寿・副議長にとって，自党内の申し合わせによるいわば「任期切れ」の議会となっていた。だから，会期前から次期正副議長候補の選任をめぐる，党内で思惑がくすぶっていた。だが，最終的に党内調整の結果，議長には，自民党で西津軽郡選出の当選4回の脇川利勝（58歳）を，また副議長には，同じく自民党で西津軽郡選出の当選4回の神四平（63歳）に絞られた。だが，地域・派閥争いから議員総会は大混乱。そこで，会期を1日延長した上で正副議長を選出して定例会を閉じた（「県議会」『東奥年鑑 1983年版』〔東奥日報社，1982年〕，178～179頁）。

2. 脇川利勝

① 経歴

脇川利勝は1923年9月9日，西津軽郡の深浦町に生まれた。県立木造中学を経て，青森師範学校卒。国民学校教諭，鱒ヶ沢高校教諭。1959年，県会議員に当選，通算4期務めた（1963年，67年落選，1971年に返り咲く）。

この間、1981年には議長に就任。1957年、脇川建設工業創設、同社長。県ダンプカー協会会長、全国ダンプカー協会副会長、青森県漁港県建設協会会長などを歴任。自民党県連会長等に就任。1977年、全国議長会より、自治功労者として表彰。1997年、勲一等瑞宝章を受章。2014年1月20日に死去、享年90であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社。2002年〕1449頁）。

② 県議選での得票

・1959年4月の県議選	6,620票（第二位）	自民党
・1971年4月の県議選	13,791票（第一位）	々
・1975年4月の県議選	9,782票（第三位）	々
・1979年4月の県議選	10,876票（第三位）	無所属
（平均得票数）	10,267票	

③ 横顔

脇川利勝は、深浦町出身である。県立木造中学を経て、青森師範学校卒。小学校、中学校、高校の教師を務めた。高校では体育の教師で、柔道、相撲、柔剣道などが得意であった。体重が93.5キロの巨漢。教師在職中に青年団運動にのめり込み、「新しい日本づくりは青年の力を結集して」と政治の道に邁進した。1959年、県議に当選。その後、2回連続して落選、しかし1971年に返り咲き、連続3回当選、この間、1981年、議長に就任。趣味は読書、酒はかなりいける方だ、という（「この人」『東奥日報』1981年12月20日、「きょうの顔」『陸奥新報』1981年12月20日）。

3. 神 四平

① 経歴

神四平は1918年10月7日、西津軽郡の鱒ヶ沢町に生まれた。県立木造中学卒。1938年から1945年まで軍隊で、陸軍曹長。1954年、鳴沢村長に当選。

合併後1964年、鯨ヶ沢町助役。1969年、県議補欠選で当選、通算4期務めた。この間、1981年、副議長に就任。自民党県連総務会長などを歴任。勲五等双光旭日章を受章。2004年8月22日に死去、享年86であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、911頁、『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1449頁、「きょうの顔」『陸奥新報』1981年12月20日）。

② 県議選での得票

・1969年9月の県議補選	12,769票（第二位）	自民党
・1971年4月の県議選	10,916票（第三位）	々
・1975年4月の県議選	11,593票（第二位）	々
・1979年4月の県議選	12,467票（第二位）	々
（平均得票数）	11,936票	

③ 横顔

神四平は鯨ヶ沢町出身である。鳴沢村村長、鯨ヶ沢町助役を経て、県議に当選、連続4期務めた。1981年、副議長に就任。剣道五段、柔剣道四段の腕前だ。1954年、腐敗選挙で揺れていた村内を收拾するためにと、若い仲間担当られて村長選に出馬、それが政治の世界に入る契機となった、という。俳句歴9年、何かあると一句ひねるのがこの人の特徴である（「きょうの顔」『陸奥新報』1981年12月20日、「このひと」『東奥日報』1981年12月20日）。

4. おわりに

今回の定例会もまた、正副議長の交代をめぐり大混乱。会期延長の末、12月19日に閉会した。古参の順からいえば、議長職は当選6期の花田一、副議長職は当選4期の神四平が最右翼と見られていた。だが、自民党の選

考委員会の結果で、議長に脇川利勝、副議長に神四平が就任した。その際、問題となったのが、津軽と南部のバランスをとるため、交互に据えるという慣例であった。自民党の議員総会はこの問題をめぐって紛糾、議会を空転させ、野党から突き上げを食った。混乱の原因は、自民党会内における「ポスト欲」の激突であった、といてよい（「社説：自民が県議会空転の反省を」『陸奥新報』1981年12月21日、「県議会の混乱—良識論「多数」に埋没、記者座談会」『東奥日報』1981年12月20日）。

（未完）